

§はじめに§

教育・研究グループにおいては、各学科における現状の分析と評価を中心に、国際交流、研究活動等を検証した。なお、今回の自己点検・評価活動では、本学の活動概況を分かり易く把握するために、教員個人の研究活動については割愛した。

§ 現状報告・評価 §

1. 全学的教育方針の形成

美術学部

<目 標>

大学教育において全学的教育方針を示すカリキュラムの編成がきわめて重要な意味を持つことは言うまでもない。本学は美術大学としての性格から実技科目がその多くを占めているが、大学理念にある「自由と意力」にそっていわゆる学科目もそれに劣らず重要視されている。いわば実技と学科とが両輪となってカリキュラムを支えているのである。とは言え、カリキュラムに関する各学科の意志の疎通をはかるべく設立されたカリキュラム委員会も、2000年までに会議が開催されたことはほとんどなく、それがカリキュラム編成における実技科目と学科目とのバランスの欠如につながっていた面も否定できない。

こうしたことへの反省から、各学科の抱えている問題の解決や大学理念の実現への提言を行なうカリキュラム委員会の積極的な運営がはかられ、毎月決められた時間に会議が設けられ、現在ではカリキュラムの編成から調整を行なうまでに機能を果している。

<現状報告・評価>

①意見集約の方法

カリキュラムに関する教員個々の意見は各学科のカリキュラム委員を通じて委員会に伝えられ審議される。そこではまた、大学理念の実現に具体的にどのように取り組むのか、また国際社会に対応し、あるいは創造力に富む学生を育成するのはどうしたら良いのか、などのきわめて難しい問題が真剣に議論される。こうした議論の過程の中で、現在では各学科の教員の意志疎通が有効にはかられ、個々の問題を全学的視野から扱う姿勢が形成されつつある。これはカリキュラム委員会の重要な意義の一つであり、委員会の今後の展開についての明るい材料として十分評価できるものだろう。

②問題解決の状況

これまで定期的開催された委員会に提出された課題はかなりの数にのぼり、そのすべてについて扱うことは難しく、ここではその大きな課題についてのみ報告する。

実技各学科と共通教育の長期にわたる連絡不足のために、車の両輪であるべき両学科のカリキュラムがいくぶんバランスを欠くようになり、まずその是正が課題になった。一方、それにとまなう時間割の過密化による必修科目の重複もあわせて解消する方向で検討が開

始されている。

美術学部は1, 4年と2, 3年がそれぞれ午前、午後に分かれて履修することになっているが、その区分を超えた科目については速やかに正常な状態に戻す作業が急務となっている。また共通教育の科目については2002年度から似通った科目の一元化、また各学科から委託された講義科目を各学科に戻す形で現在までに15%ほど科目の整理・統合を行い、時間割の過密化解消に一役買っている。時間割に関しては、資格関係の講義、語学の一部が各学科の必修科目と重複する現象が見られていたが、これについてもかなりの改善がなされるようになった。

その一方で300人以上を超える受講者のいる講義、またそれとは逆にきわめて受講者数の少ない講義などには、授業を効果的に運営するために、受講生数に上限や下限を設けるなどある程度の制限を加えることも検討されている。

また従来、ファインアート系とデザイン系が別個に設定していた科目の中から全学的に履修が可能であるものについては、一部オープン科目として他学科の学生が履修できるようになったことも特筆されるべきだろう。

< 課 題 >

カリキュラム委員会は現在のところ、過去から引き継いださまざまな問題を是正する方向で運営されているが、本来は大学理念にある「自由と意力」を具体的に実現してゆく議論の場でなければならない。

そうした反省と決意の中で、上記で触れた課題をさらに速やかに解決すべく努力するとともに、まず共通教育を従来の大学に存在していた一般教養とは別の、ファインアート系とデザイン系の実技各学科を底辺で結びつける領域、すなわち美術教育に必須の講義系科目を供給し、しかも現代社会に対応できる教養や国際的な感覚を身につける基礎的学科として再度位置付けることが大きな課題として残されている。

一方、他学科の学生が履修できる専門的な科目としてのオープン科目に代表されるように、実技各学科をつなぐ新しい掛け橋的存在である実技系授業、およびファインアート系内、デザイン系内で類似の技術を習得できる実技科目を増設することなども近い将来の展望として、その討議に入る段階にまでいたっている。

今後は時代に即した教育科目の多様化が想定され、これ自体は歓迎すべきことであるが、その際に学則別表を変更することは極力避けることとし、多様化の根底に基礎的な体系のあることをむしろ尊重したいと考えている。それこそが履修体系の明解さの維持であり、カリキュラム構成の原則だからである。

現在このようなカリキュラムの重要性に対する各学科の認識は確実に進展しており、近い将来には美術大学にふさわしいカリキュラムが整備されるのも時間の問題であると確信している。これからも多摩美術大学のブランドとして、実技科目および共通教育科目からなる特色あるカリキュラムの構築に努力を惜しまない所存である。

造形表現学部**<目 標>**

造形表現学部のカリキュラム委員会は、各学科のカリキュラム委員および教務主任と事務職員が、夜間という限られた授業時間の中で充実したカリキュラムを提供できるように、学部全体、各学科のカリキュラム編成等について討議・検討を行い、教授会へ提案している。

<現状報告・評価>**①意見集約の方法**

カリキュラム委員会で検討し、結論が出ない場合は各委員を通して各学科に意見を求め、再度検討している。また、委員長作成の議事録を配布し、各学科と事務部両方で検討を行った結果を委員長が教授会へ提案するという形をとっている。

②問題解決の状況

おもに議題となっている課題は、編入学試験方法、卒業認定、単位制、ワークショップの開講、教職課程、教室・機材の使用と管理、教室の設備、共通専門科目の設置、基礎教育科目の改正などがあげられる。実際には、編入学試験方法、卒業認定、教職課程、教室・機材の使用と管理、教室の設備などが実行され成果をあげている。

<課 題>

今後もカリキュラム編成の充実については課題が残されており、共通専門科目、基礎教育科目の改正、教職課程、美術学部との他学部履修などについて検討が必要である。また各学科で報告された検討結果を文書化していくことが課題であると考えられる。

2. 各学科の現状**美術学部****絵画学科日本画専攻****①教育目標**

絵画学科日本画専攻では、膠という接着媒体を使用する。多様な絵画表現のなかの一つであるとして日本画を捉え、長い歴史を持つ東洋絵画のなかの日本画とは何かを考え、次の世代の自由で豊かな日本画の創造を目指すことを主眼としている。

日本画は、中国大陸にその源を持つ表現技術である。その技術が日本に伝来し、ときのなかで醸成され、現代の日本画へと受け継がれて来た。石、植物、金属など、およそ地球上に存在するあらゆる物質を顔料として描く日本画の技法は、飛鳥・白鳳の時代に確立され、今日に至っている。稀有で貴重かつ豊潤な日本画の表現世界は、この長い歴史に裏打ちされた技法の深遠さこそが基盤となっているといえるだろう。

こうした日本画の、膠・胡粉・岩絵具・顔料・墨・箔などの素材とその用具など、伝統的な制約が大きい日本画の技法を駆使できるようになるには、かなりの勇気・忍耐・覇気を必要とする。今日、小学校・中学校・高等学校での日本画教育は皆無に近い現状にあり、近代西洋思考をもって、伝統的な日本画を捉えることは困難である。

それだけに、現代絵画を創造する大いなる発展性が秘められているといえる。この大きな困難と不自由さを乗り越えてこそ踏み込むことができる、自由な表現世界が広がっているのである。

若々しい感覚と新鮮で気力に満ちた才能をもって現代の日本画の問題に取り組み、明日の日本画を築く若い力に期待する。常に流動的・進歩的であるよう心がけ、自由を信条として守りながら、各自の個性を十分に発揮し、自発的な制作を通じて努力を集積し、大胆な創造を実践し、美を探求する表現者としての基本的な態度の修得をめざしている。

②カリキュラム構成

- 課題実技Ⅰ～Ⅳ（１～４年課題実技）
- 日本画実技Ⅰ～Ⅳ（１～４年/ コンクール春季・夏季）
- 材料基礎学Ⅰ・Ⅱ（１・２年/ 絹本実習、箔実習、技法講座、表具実習、絵の具実習、模写実習、材料研修旅行）
- 日本画特論Ⅰ・Ⅱ（１・２年/ デッサン）
- 日本画特論Ⅲ（３年/ ゼミ、和紙ゼミ）
- 特別実習Ⅰ・Ⅱ（３・４年ゼミ）
- 卒業制作（４年）

１，２年次は日本画の表現技術の習得、素描力の充実、自由な創造を実践するための基礎姿勢の育成を心がけたカリキュラムとなっている。

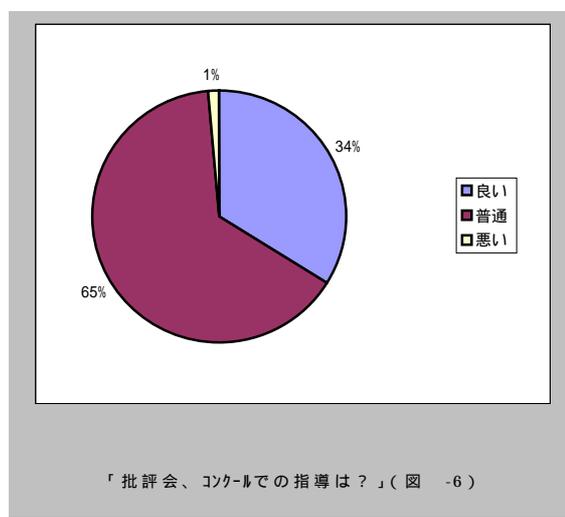
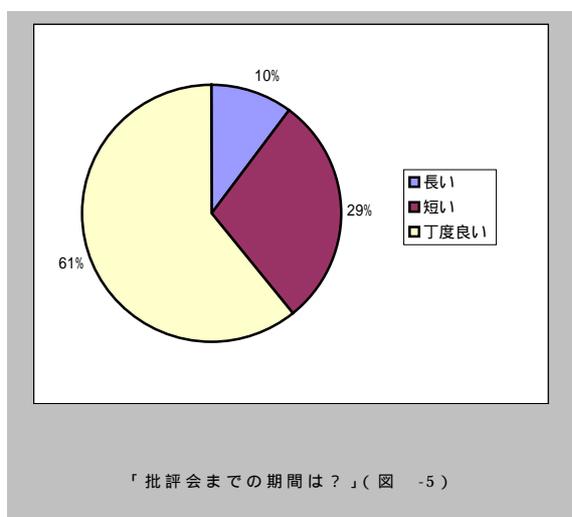
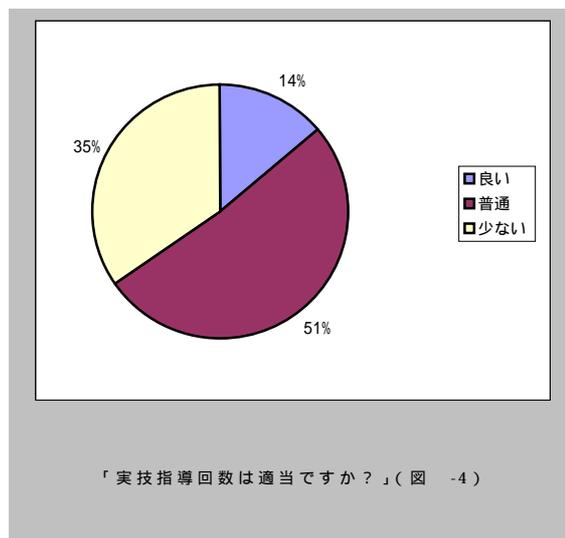
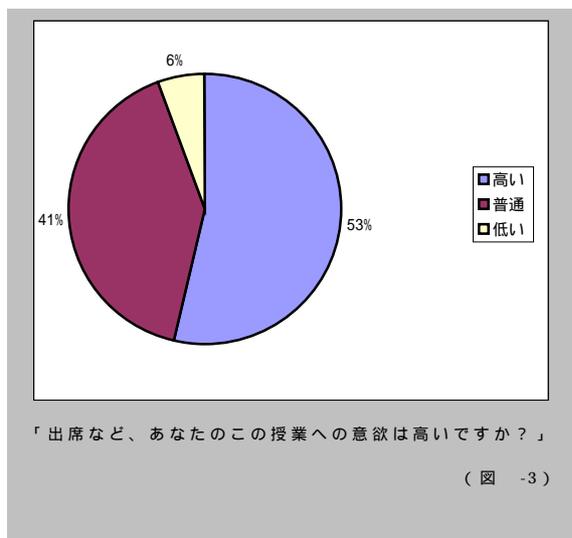
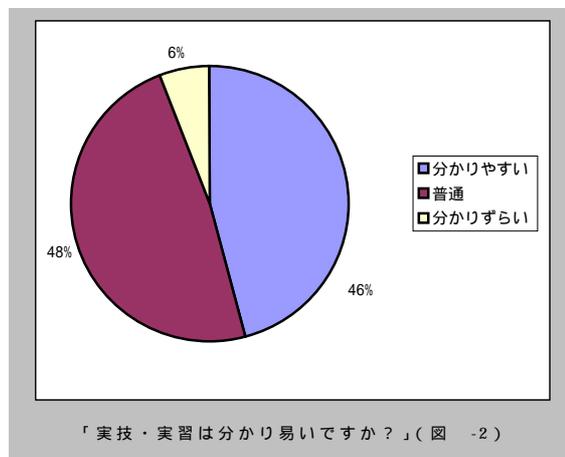
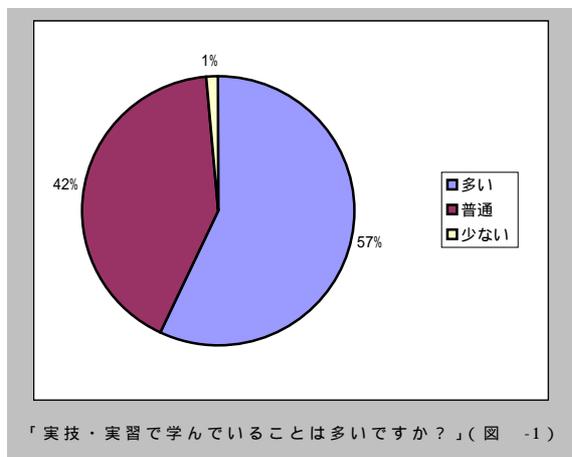
３，４年次は各自の主体性・自主性に基づいた作家としての搜索活動を触発し、表現技術・創造精神の形成を行う指導をしている。コンクールとして年２回担当教員以外の指導で批評会が行われる。

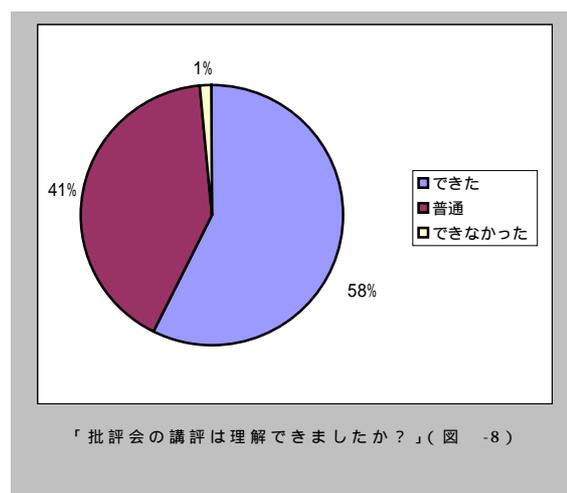
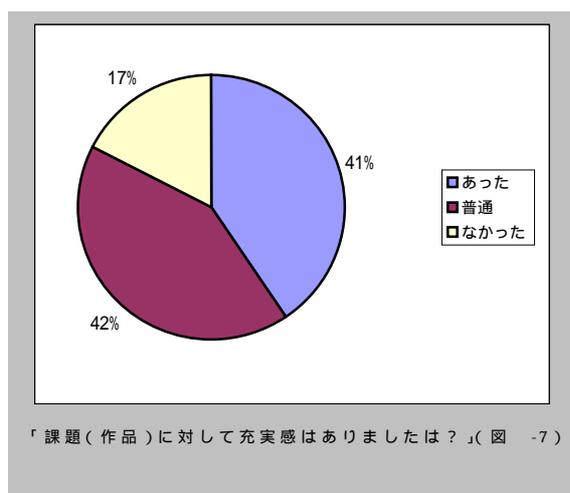
特別実習として箔・絹本・技法講座・表具・絵の具・材料研修旅行（奈良、京都、福井、金沢などへ墨、絵の具、和紙、金箔の製造見学）素材研究も重要と考えている。模写実習に関しては、二条城美術研究所所属の特別講師を依頼し、より実践的模写を学生に体験させている。

[実態]

日本画の授業に関するアンケート調査の結果

2003年度の学生を対象とする。(学部1～4年、院1年)





③教育効果

卒業生、学生の各コンクール等での受賞状況

青垣 2001年 日本画展

- 第 15 回 優秀賞 (吉村朝丈)
兵庫県知事賞 (安田敦夫)
兵庫県芸術文化協会賞 (真島友子)
- 第 16 回 東京新聞賞 (上坂美樹)
- 第 17 回 東京新聞賞 (柏原祐子)

佐藤太清賞公募美術展

佐藤太清賞 (西川芳考)

奈良 万葉日本画大賞展

- 第 1 回 万葉日本画大賞 (大矢真嗣)
準大賞 (木下めいこ)

第 5 回雪梁舎フィレンツェ賞展

フィレンツェ大賞 (亀山祐介)

臥龍桜日本画大賞展

- 第 12 回 優秀賞 (日暮謙一)
- 第 14 回 大賞 (菅原桃佳)
- 第 15 回 大賞 (松村ちひろ)
優秀賞 (伊藤正次)

(財) 佐藤国際文化育英財団奨学生

- | | |
|--------|---------|
| 第 10 回 | (福井青士) |
| 第 11 回 | (坂本藍子) |
| 第 12 回 | (松村ちひろ) |

堀越泰次郎記念奨学金

- | | |
|-------|--------|
| 第 1 回 | (上坂美樹) |
|-------|--------|

④専任教員と非常勤教員の役割

日本画の指導体制は全体指導体制をとっている。各学年の担当を決めているが担当学年以外の指導も積極的に行なっており、縦、横の連携、協力を自由にするため柔軟な指導体制を目指している。

実務的には、各授業のカリキュラムの立案、構成、指導は専任教員が行い専任教員主導の体制をとり、特別講座講師として年 2 回 3 人の学外の講師、名誉教授、学内他学科の講師、特別実習の講師の方々を依頼し専任教員とは違った目線からの指導を行なっている。

⑤研究活動

* 共同研究について

2001 年度

「日本画におけるバインダーの現在とその可能性」

- ・ 現在使用されている膠の分析

市川保道教授、榊田隆一教授、中野嘉之教授、戸田康一教授、米谷清和教授

植本誠一郎氏 (ホルベイン)、上田邦介氏 (うえまつ)、中川晴雄氏 (中川胡粉)

2002 年度

「日本画におけるバインダーの現在とその可能性」

- ・ 紙と膠について

市川保道教授、榊田隆一教授、中野嘉之教授、戸田康一教授、米谷清和教授

植本誠一郎氏 (ホルベイン)、上田邦介氏 (うえまつ)、中川晴雄氏 (中川胡粉)

⑥就職支援

主に 4 年生を担当する教授が受け持ち学生との個々の対話を重要と考え、進路を共に考えている。

作家に育っていくことを主としている。

⑦課題

授業に関するアンケートから、教育の原点である学生とのコミュニケーションは、ほぼ満足できる内容をもっていると思われる。美術特に日本画指導は日本という特殊な環境と風土に根ざしている、素材の使用は新しい方向に向かおうとしている、但し西洋、アメリカからの文化流入に対し東洋画としての日本画の位置付けは、創作の思考、伝承等、現代

日本画は厳しいところにある。

課題としては指導回数、学生の課題提出に対する意欲増進は今後十分な検討と実践を推進すべきである。

絵画学科油画専攻

①教育目標

表現手段が多岐にわたっている現在、美術教育は従来の技術指導や、画一的な全体指導では対応が難しくなっている。各人の個性差や、現役から浪人までの年齢差のある学生の、それぞれが志向する表現手段を考慮し、積極的な制作意欲を導きだす指導態勢を整えることが重要である。この場所が、将来作家として美を創造してゆく為の幅広い基盤となるよう育成に努めたい。

②教育効果

2000～2003年度は、カリキュラムを遂行する為のクラス選択制が、より明解に推移した4年間だった。具体的には2000～2001年度の6教室制が、2002年度の過渡期を経て、2003年度には3分割に再編成された。2001年度以降再編に着手し、順次カリキュラムと連動したクラス編成の見直しをはかって来た結果である。具象的傾向、抽象的傾向、同時代美術（コンテンポラリー）の3つの大きなグループに分割され、クラス選択は学生にとってより分かり易くなったと言える。

クラス選択は、1年生後半、2年生、3年生の計3回あり、その度に希望により、移動、入れ替わりがある。クラス選択説明会だけでなく、先輩や友人からの情報もあり、定員の限界を越えない限り、ほぼ希望どおりの選択が可能となった。さらに内容の充実が必要だが、学生が自分にふさわしいクラスを選択でき、教員との関係も円滑に行われている実態を見て、教育効果は以前よりもおおむね向上しているものと自己評価したい。

(2003年度はクラスの名称が、グループ、またはアトリエと学年により混在していたが、2004年度から、1年～4年まで名称をグループに統一予定)

『グループ1』

美術は思考のみで生み出されるわけではない。たとえ美術作品を作り出す、唯一思考する私たちだからといって、人間はすぐれて突出した存在だということにはならない。地球上に生きる限り、自然界を構成する一員にすぎないことは否定できないからだ。そのことを謙虚に受けとめて美術を考えてみると、自然、人間、生活環境の中の物、それらの「存在を見る」ことから得られるインスピレーションは極めて重要であることに気がつく。そして、見る人の内部でそれが思考と結びついた時、初めて表現上の有効なファクターへと上昇する。

その表現とは、一面的に「見ること」から「描くこと」へと移行することだとは言いきれない。「見ること」から「見ないこと」へ、そして「見ること」から「描かないこと」への移行も、やはり表現であることに違いはないはずだ。だがそれらの移行する軌跡は、い

ずれも「見ること」から始まった「物の存在」との関わり方の変種だということができる。どのような表現手段でも、思考のみの空転を避け、「物の存在」を「見る」という始源的な行為に、いつでも戻れる柔軟な循環システムを自分の体質として確立することが重要だと考える。その上で、近、現代の美術の変遷を考慮し、「リアリズム」「リアリティー」「在り方」という広範囲な「存在」についてのとらえ方を考えてみたい。

したがって、グループ1では、特にモデルなど、物に密着した具象的な表現をはじめ、ゼミ等によって抽象表現や、自己発見の為の感覚的ドローイングを試み、また脱平面による作品を含めた多角的な表現の実践が可能となっている。

『グループ2』

グループ2は、抽象絵画や現代造形について研究し、自己表現を探求することを目標に掲げている。「絵画とは何だろう」という疑問や、この時代と社会にいる一人として生まれる創造的な問題意識や、自分にとってのリアリティーを大切にしながら作品制作を行っている。ともすれば情報の中に埋没してしまいそうな自己をあるべき自己として再確認し、制作することの楽しさと困難さを体験しつつ、それぞれの真の創造を獲得すべく指導を行っている。

1, 2年では、現代造形の基礎演習として各教員の演習と講義を通して、特に素材と造形の研究を行い自己表現を探求している。ドローイング、オートマティズム、コラージュ、アッサンプラージュ、抽象絵画、レリーフ、ファウンドオブジェ、インスタレーションなどを試みている。3, 4年では、専任教員4名による4クラス制で、教員それぞれの個性とアイデアを生かした授業を行い、きめ細かな指導を行っている。面接による年間制作計画や進路の相談、ポートフォリオやプレゼンテーションの指導を行い、美術館などでの学外授業や研修ゼミ旅行も行っている。1人担任制による閉鎖性が問題となるが、グループ内教員が相互のクラスの批評会や指導を受け持つことで開かれたものになるよう努めている。今後、更に開かれた常態を目指していこうと考えている。

『グループ3』

2002年度より現グループ制が始まり、グループ3のサブタイトルとして、「同時代美術」を掲げて来た。それは一般的にカテゴライズされた「現代美術」をさらに積極的にとらえ直し、変化する時代（その時々々の今）に即応した美術、表現を考えるグループであることの表明である。専任教員もその「今」に対しての制作研究と発表活動をしていると自負している。また本専攻の歴史を考えても、時代（美術界）に対してつねに先駆的な発言、発表をする作家を輩出して来た。またそれらの作家の多くは、絵画表現にとどまらず、多岐のメディア、表現によってその存在感を強くしている。そのよき伝統を守り、さらに先鋭化するために努力していかなければならないと考える。

しかし、一方で先鋭化することは、それを標榜した途端、逆に鈍り、形骸化し、閉鎖的になり、ある種のタコ壺化の危険を孕んでいる。グループ3内でも、完全な個別教室制を採らないのも、美術教育において、教える側と教わる側が出来るだけフラットな関係を保ち、すべてに開かれたシステムが望ましいと考えているからである。ただそのことにより、教員がグループ内すべての学生を把握しなくなってしまう。もちろんそれは事実上不

可能であり、たとえ出来たとしても非常に形式的なものとなってしまうといったジレンマに陥る。現状では低学年の指導を非常勤講師の比重を高めることで、全体のバランスを何とか保っている。

このように開かれたシステムと先鋭化は矛盾を孕んでいるが、どちらか一方を取れば良いというものでもないので、今後も継続して検討してゆくべき問題である。

グループ3では今まで特別講義やワークショップを通じ、他学科との交流を試みて来た。今後さらにそれを深め、大学という有機体の中で、それを支える一つの細胞として、あるいはラボとして、またあるときは学外に対する本学のサテライトとしての機能、存在でありたいと考えている。

受賞年度	受賞名(コンクール名)	氏名	卒業年度
2000年度	群馬青年ビエンナーレ 群馬県立近代美術館 奨励賞	雨宮庸介	学99卒
	フィリップモリスアートコンペ 大賞	奥村雄樹	学00卒
2001年度	3.3㎡(ひとつぼ)展 グランプリ	雨宮庸介	学99卒
	トーキョーワンダーウォール 入賞	桑久保徹	学01卒
	アートボックス 大賞	水野 暁	院01卒
	トーキョーワンダーウォール 大賞	原 良介	院01卒
	FREE ART FREE2001 大賞	鮫島大輔	院02卒
	トーキョーワンダーウォール 大賞	鮫島大輔	院02卒
	V O C A展 奨励賞	大谷有花	院02卒
	キリンアートアワード 奨励賞	水谷 一	院02卒
	八王子夢美術館 奨励賞	水谷 一	院02卒
	ターナー 美術手帖賞	峰松宏徳	学03卒

学生・卒業生の受賞歴(表 -1)

③課題

油画専攻全体を、改善、向上の視点から見ると、次のことが課題としてあげられる。1年生前半の共通カリキュラムである。基礎課程に位置づけられてはいるが、基礎教育としての明解なビジョンが学生に伝わっているかどうか疑問な点もある。難しい問題が含まれているので、時間をかけて考察する必要があるが、基礎教育にはどのようなカリキュラムを立ち上げてゆけば良いのか、また基礎にどのくらいの時間を必要とするのか、基礎そのものの考え方を含め、今後検討を重ねなければならない。

それだけに留まらず、ファインアートの横の連携を含め、美術大学全体の基礎教育の充実に向けて、改善してゆく余地は残されている。

④大学院

大学院生は、作家に一番近いところに位置している。作家としての自立を考えれば、クラス担当制の中に埋没すると、場合によっては逆に拘束されることも予想される。従って大学院では、学部の時のようなクラス制は採らない。学部で培った各自の制作研究をバツ

クアップし、作家活動に向けた一人の表現者としての自立の手助けとなる指導をめざしている。通常、教員がアトリエに指導に出向く以外に、院生からの教員へのアポイントにより、学部時の担当教員以外の様々なジャンルの教員との接触を可能にし、幅広い視野に立つ考察が持てるようにしている。また、学部で行われるどの特別講義にも参加できる。

一人あたりの壁面積は十分に確保されており、個展、グループ展、コンクールへの出品等、積極的な発表活動が行われている。通常の指導の他、講評会は年2回である。各院生が希望した3名から5名の教員により、各アトリエで随時批評を受ける。批評した教員は協議して評価を決定する。また修了制作では、教員全員の協議により評価を決定している。

⑤専任教員と非常勤教員の役割

専任教員から非常勤教員へ指導の方針を伝え、それに沿ったカリキュラムの内容で現場での指導を行なっている。非常勤教員は、基本的には1,2年次の授業を担当しているが、グループによっては3年次以上の学年にも指導に関わっている。

絵画学科版画専攻

①教育目標

多様な版種による多角的な視覚と思考を技法と修練によって、より新鮮で創造的な世界を切り拓き、作家としての基礎的能力を深める。

②カリキュラム構成

1年次：木版・銅版・リトグラフ・シルクスクリーン各版種の道具の扱いや素材について基礎技法を学び、コラージュ制作や色々な素材を用いたオブジェ制作・人体デッサンなどの演習を通じて幅広い表現を学ぶ。

2年次：自身の選択した版種に分かれ、より詳しい技法の習得、自己表現の在り方について探る。また、1年次に続き、特別講師による演習を通じてより幅広い表現を学ぶ。その他、CM制作等で活躍する映像クリエイターを招き3DCGを用いて版画作品の映像化の実践を行う。

3年次：自己表現の探求と共に、マスメディアや、ギャラリスト・評論家・作家等、第一線で活躍する方を講師として招き、実際のテーマにより現代版画を考えていく。テーマとして「メディアからみた現代の版表現」「デジタルによる版表現」「メディアアートの今後」「国際コンペについて」など。
その他フレスコ画、テラコッタ粘土、道具づくり等の演習がある。

4年次：1年を通して卒業制作と版画集を作成。
また、卒業制作展を銀座等の画廊にて開催。

③教育効果

アンケート調査の結果

・2,3年次の基礎実技においては、70%～80%の学生が、良い又は普通、分かり易いという結果により、教育効果があると評価する。

- ・演習：期間が1週間と短い事もあり 10%前後の学生が理解できないと回答しており、従って今後この期間を1週間以上に延長することをカリキュラム上検討する。
また、モーショングラフィックスの授業については昨年度使用したソフトが難しすぎたため理解度が低かった。今後は、ソフトの専門家を入れて指導にあたる。
- ・版画の専門分野については、おおむね学生に評価されていると考える。

その結果として、毎年卒業する学生の約 1/3 の学生が大学院へ進学をし、以下の通り各コンクール等で受賞する等卒業後、作家として活動をしている。以下大賞受賞者のみ記載。

1 期生

大矢雅章（日本版画協会 協会賞受賞）

2 期生

大塩紗永（01 池田満寿夫芸術記念賞/大賞受賞版画協会/02 準会員佳作賞）

羽岡 元（03 プリンツ 21 グランプリ グランプリ）

3 期生

傍嶋飛龍（00 池田満寿夫芸術記念賞大賞受賞/第1回利根山光人記念大賞展ビエンナーレきたかみ大賞）

杉山 実（グラフィックアート「3.3 m²展」グランプリ受賞）

久坂 奏（フォトグラフィックアート「3.3 m²展」グランプリ受賞）

4 期生

三瓶光夫（04 プリンツ 21 グランプリ グランプリ）

5 期生

藤井 哲（大阪現代版画コンクール展大賞受賞）

6 期生

全田紗和子（03 第80回記念春陽展大賞受賞）

*大賞以外の受賞者数：約 20 名

④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員：版画基礎実技と専門分野の指導と講評

非常勤講師（名誉教授・客員教授・非常勤講師・特別講師）：1, 2年の基礎過程と講評。又、特化された専門分野の指導

⑤ 研究活動

シルパーコン大学・多摩美術大学絵画学科版画専攻版画作品の交換展

- 展覧会名 Tama Art University, Japan&Silpakorn University, Thailand 2002
- 展覧会会期 2002年6月12日～6月30日
- 開催開場 シルパコン大学ギャラリー
- 内容 シルパコン大学の学生及び教職員、多摩美術大学絵画学科版画専攻大学院生による版画作品交流展。
シルパーコン大学(39名)、多摩美術大学大学院生(27名)により構成。

- 展覧会名 シルパーコン大学・多摩美術大学による版画交換展
- 展覧会会期 2003年10月27日～11月8日
- 開催開場 多摩美術大学絵画北棟1階エントランスホール
- 内容 シルパーコン大学の学生及び教職員、多摩美術大学絵画学科版画専攻大学院2年生による版画作品交流展。
シルパーコン大学(28名)、多摩美術大学大学院生(21名)により構成。

【高大連携事業】片倉高校 造形美術コースの生徒の大学における学習

- ・銅版 エッチング・銅版の多色刷り(ヘイター刷り)
担当 教授:渡辺 達正 助手:2名
- ・木版 木口木版 製版行程・木版画の説明・木口木版 刷り
担当 教授:小林 敬生 助手:2名
- ・リトグラフ アルミ板リトグラフ・ベニヤによるリトグラフ
担当教授:小作 青史 助手2名

【版画体験実習】

- ・2001年7月13・14日 pm13:30～pm16:00
受講生人数 (各版種10名)
- ・2001年7月27・28日 am10:00～pm16:00
受講生人数 (各版種10名)

【石膏デッサン】2001年7月13・14日 am10:00～pm12:00

受講生人数 30名

【版画体験実習】2002年7月22・23・24・25日 am10:00～pm16:00

受講人数 14名

【版画体験実習】2003年7月22・23・24・25日 am9:30～pm5:00

受講人数 9名

【大学版画学会】

版による独自の造形表現と大学における研究及び教育の発展を目指す。

大学版画展は、次代を担う若い人々の制作発表のみならず、版画を通じて社会と美術館、大学との深い交流をはかっている。

- ・ 第 25 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2000 年 12 月 2 日～12 月 17 日
- ・ 第 26 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2001 年 12 月 1 日～12 月 20 日
学部 4 名 大学院生 8 名
- ・ 第 27 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2002 年 11 月 30 日～12 月 20 日
学部 1 名 大学院生 10 名
- ・ 第 28 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2003 年 12 月 6 日～12 月 21 日
学部 3 名 大学院生 9 名

【チャリティ販売】

期間：大学版画展会期期間中（毎年）

場所：町田市立国際版画美術館

売上げの半分から経費等を除いた全額を、町田市の福祉団体へ寄付

本学 参加者人数 平均 50 名 売上げ平均 110,000 円

【公開セミナー】

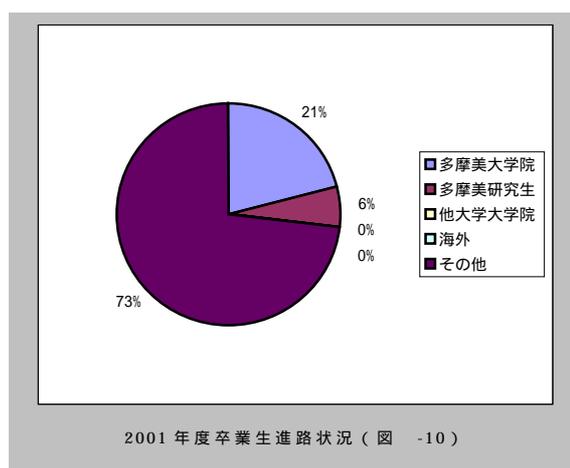
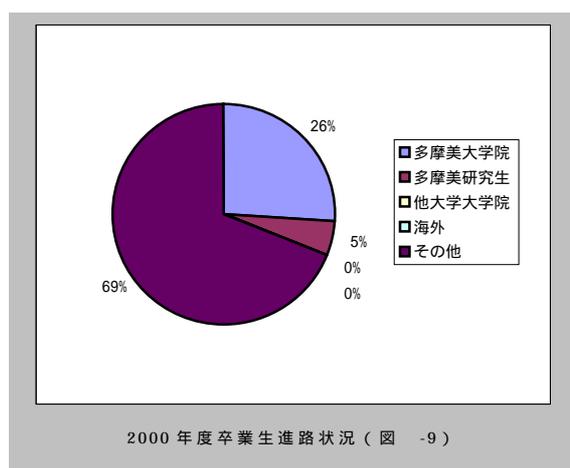
2002 年度 油性・水性木版の多版摺り 町田市立国際版画美術館

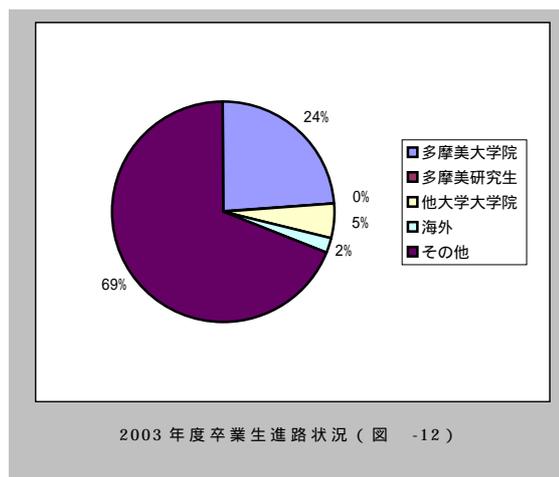
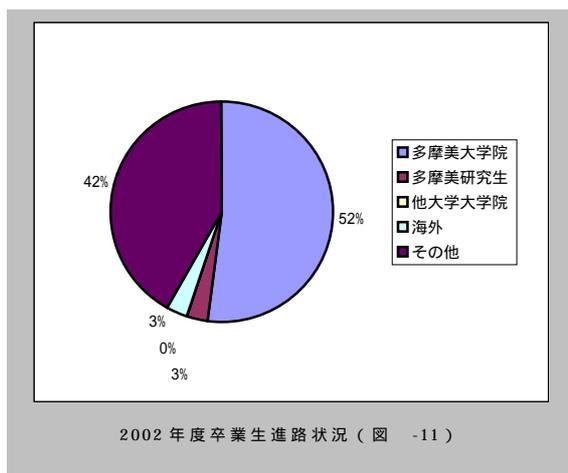
2003 年度 足刷りリトグラフ 町田市立国際版画美術館

- ・ 現状としては、他学科が行っていない様な事業を行うことができていると評価しているが、予算が少ない事が不十分な点としてあげられる。

⑥ 就職支援

*全力で作家にするために努力している。





彫刻学科

①教育目標

彫刻は立体の芸術である。人間の歴史とともに始まった、造形表現のなかで最も古くからあった表現形態の一つである彫刻を、自らの表現手段として現代的な展望から、自分自身の手で見、手を使い、自己表現の創造の道を目指す。

我々はすばらしい造形文化の遺産を数多く受け継いでいる。それらは遠い祖先の人たちの貴重な生活の証でもある。

その文化遺産から、我々は多くのことを学ばねばならない。同時に現代に生きている者は、自然を尊び、人と社会と芸術のかかわりを大切にして現代の創造を探究していかねばならない。

現代彫刻は、多様化する価値観の中で人間の意識の変化や、新しい素材や技術に敏感に反応して、様々な表現形態を生み出し、個々の創造の領域を求めることとなった。今日の彫刻を目指すということは、新たな領域への果敢な挑戦を始めることでもある。

彫刻学科に学ぶ学生は、自然形態の探求と素材の扱い方などの基礎を徹底的に学ぶとともに、創造の原点となる「自己のイメージの発展」や「ものの見方」を養い、それを基本として自己表現の創造へと進む。

彫刻学科では、学生と教員との人間的交流を基盤にし、お互いの思考や創作を通して彫刻芸術の修練と探求を実践する。教員は体験を通しての助言と指導を惜しまない。「何をしたいか」「何を学びたいか」という目標をしっかりと見据えて、自らの手による探求と努力、完成の練磨と向上に努めることこそが、それぞれの明日を開く鍵となるのである。

[実態と現状評価]

八王子キャンパス計画の実現に伴い、近年、本学科の掲げる教育目標も概ね達成されつつある。それは素材ごとの専門工房に専任・非常勤教員をそれぞれに配した指導システムが、「創作研究と発表との一体化」を実現した専用ギャラリーとの連動により、カリキュラムの充実に貢献している。また、専門（専攻）制の導入により個別指導の徹底化が可能と

等を実施し、専門領域にとどまらず多角的な研究にも努めている。さらに、研究発表の場として学内ギャラリーでの発表や、産官学共同研究の実施等により客観的な作品批評の場を創出し、美術と社会との関わりについても学習させており、これらの経験が卒業後の進路においても活かされている。

次に、問題点であるが、専門課程（3，4年次）において素材ごとの専門工房での制作・指導によって、きめの細かい指導がなされる反面、工房や学生の孤立化も一部で指摘される。この問題は学科内の問題にとどまらず、学内における各学科の孤立化の問題と同義であり、今後、学科内の指導体制や工房システムを再検証し、教員同士の授業相互評価システムの確立など、開かれた教育の実現に努力する。また、他学科の学生との交流を積極的に促して、学科間交流の活性化をはからなければならないとも考える。

④専任教員と非常勤教員の役割

本学科の指導体制は、基礎課程、専門課程ともに、専任教員の専門（専攻）分担制にもとづき、専任教員と非常勤教員を担当授業に配置し、専任教員主導のもとに非常勤教員の協力を仰ぎながら、指導にあたっている。各専門によって非常勤教員の役割分担には若干の違いはあるが、具体的には、各授業の立案・構成・指導の中心は各専門の専任教員が行い、その補佐役として非常勤教員の役割があり、あくまでも専任主導型の指導体制といえる。しかし、この体制は、他の専任・非常勤どうしの、横の連携、協力が少ない縦割りの体制であり、授業進行のし易さの反面、指導方針が不透明で客観的評価に欠けた授業になりかねない。今後、複数の指導教員による授業の導入や、非常勤及び特別講師による独立した講座の開講、専門領域を超えて指導にあたる教員の配置など、常に意見交換や客観的評価の可能な指導体制を実現したい。また、非常勤教員の選考方法を見直し、時代に対応した幅広い人材の確保にも努めたい。

⑤研究活動

研究活動については、本学科が過去に10年間にわたって実施した長野県更埴市との彫刻設置事業の実績をはじめ、山形県寒河江市への彫刻設置事業（1999～2003年度）、聖路加国際病院での展覧会の開催（2001、2002年度）、2003年度には八王子市と本学との共催による、八王子市夢美術館開館記念事業・多摩美術大学彫刻展の開催（2004年度も開催予定）など、学内での研究発表にとどまらず、日頃の教育効果を地域社会に広く公開し、美術教育の理解と交流の場を創出して、学生の将来を見据えた学習支援活動を積極的に行っている。さらに、開かれた大学教育をめざして教育内容の積極的な公開に勤め、地域社会に根ざした教育の実践に今後とも努力する。

⑥課題

情報化が加速する現代社会において、若い世代の美術の可能性への追求は、既存のカテゴリーを超え、従来とは違った経緯で社会と関わり始めている。「絵画・彫刻・デザイン」などといった色分けは彼らには存在しない。あるのは、目の前にある現実であり、現実が引き起こすあらゆる事象そのものがモチーフとなり、アートと成り得るのである。今後、ますます経済のグローバル化が進み均質化する価値観のもと、美術もまた時代の波に飲み

込まれていくのか。このような現実を踏まえ、彫刻学科では美術大学が果たすべき役割とはいったい何かを常に念頭におき、時代に翻弄される人間ではなく、自分の目で視、思考する自立した芸術家の育成を目指して、新たな美術教育の可能性を模索していきたい。それには、伝統と革新のバランスを保ちながら、幅広い教育を実践することが大切である。一方、大学本来の在り方として、生きた教育の実践には何より、教員個々の研究体制の維持と充実が必要不可欠である。

工芸学科

①教育目標

文明の叡智の結果誕生した陶・ガラス・金属という質料を用いて、情報文化が欠落させてしまっている「モノ」のもつ圧倒的な存在性を造形へと結実させる、これが工芸学科のめざすものである。

かつてものを造ることは、何のためという目的を探し、つくるべきものを計画、それをもとに素材を活用して実現する、という総合としての人間的行為であった。しかしながら、高度近代化社会は大量消費の効率追及のために、つくる行為を分割させ、人がつくることや、つくられるものへの認識能力を失い、総合としての人間的行為を二義的あるいは趣味的存在へと押しやっていった。さらに時代は、非物質つまり電磁や電波などによる仮想の情報を、現実として受け止める文明を展開するようになった。

工芸学科はそうした状況に異議を唱え、現代において、陶・ガラス・金属という実在を使い、手でものをつくることの意味を提言していく。また、生活に深くかかわるべき工芸において、何が人間にとって望ましいものなのか、何が我々の時代に応答し得る造形概念なのか、個々人が模索する美術教育を行う。

多摩美術大学における工芸教育は、従来の、いわゆる工芸の概念では律し切れない独特の教育研究を実践し、国際的な評価を得て来た。陶教育は、陶素材による現代美術を創作しており、また、日本ではじめて本学に導入されたガラス造形の教育は、国際的なガラス工芸作家を多数輩出している。

工芸学科は、伝統的な日本の工芸観や西欧的な美学の芸術思考を超越し、時代の新たな価値観を構築し、世界的なフィールドで活躍し得る陶・ガラス・金属の現代造形作家を育成する。また、デザイン工芸の指導機関や社会教育施設などで指導に携わる教育者や研究者、工芸工房やデザイン社会などで企画・デザイン・制作に携わるクリエイターを育成する。

②カリキュラム構成

陶、ガラス、金属、それぞれのプログラムは本学科の教育目標を達成することを意識し、実材の違いから来る、あるいはそれぞれの歴史的背景を考慮して、独自のカリキュラムを組んでいる。本学科では思考に重きを置き、技術の習得を主目的としていない。実技の主軸を造形演習行為とし、造形論としての思考と、それを作り上げる技術を一体化して行う方向性を持つ。カリキュラムが正しく機能しているかの見直しは毎年の恒例としている。これは専任、非常勤の教員が反省熟考し、学生からの要望も組入れ、必要事項の変更を行

っている。事例として、3つのプログラムを希望に沿って経験する「異素材との組み合わせによる造形」課題を3年時に取り入れている。教員側の負担は多大なものがあるが、学生が交流し、他の実材を知る有効な授業となっている。

③教育効果

実材を扱うことの喜びや困難さに直面する学生達は卒業を迎える頃にはどのように仕事を継続するか思案し、それぞれの方向を決める。実作者であれ、デザイン企画の分野であれ、実材に正面から向かい合った者の独特な視点が活かされている。陶プログラムは他大学と異なり、現代造形を目指すユニークな存在としてあることは周知の事実である。陶造形の分野では日本のみならず世界のリーダーとして活躍する者が多い。ガラスプログラムは日本で最初に設けられ、その分野で幾多の活躍する卒業生を送り出している。優れたガラス展では招待される作家の半分以上が本学出身者で占められることが証明している。また、金属分野では現代を強く意識した造形が行われ、独特な方向性が現れて来ている。多くの卒業生達が自分自身の工房を設立し制作活動を継続していることから伺われる。

思考に重きを置く教育は現代社会から強く求められ、その教育が困難なことであるからこそ注目をあびている。大学院への進学希望が高まって来ていることはその見逃せない事実である。単に仕事を継続するための進学ではなく、思考と造形の連動をより充実して行える場として院生は捉えて来ている。

受賞年度	展覧会	受賞名	氏名	作品名	卒業年度
2001年度	高岡クラフトコンペ	グランプリ受賞	太田真人	『a peel of light』	学 93 卒
	Glass Craft Triennale	佐竹ガラス大賞受賞	土屋章		学 98 卒
	第 37 回 神奈川県美術展	平面立体部門 大賞	小林秀幹	『静かな流れの中で』	院 98 卒
	第 35 回女流陶芸公募展	女流陶芸大賞	齊藤美千代	『間』	学 01 卒
2003年度	第 41 回朝日陶芸展	グランプリ	古川敬之	『Core?<!Y』	学 93 卒
	第 37 回女流陶芸公募展	女流陶芸大賞	星 巻	『想』	院 00 卒

学生・卒業生の大賞受賞歴(表 -2)

受賞年度	展覧会	受賞名	氏名	作品名	卒業年度
2000年度	第 18 回朝日現代クラフト展	優秀賞	志賀 英二		学 94 卒
	第 3 回現代ガラスの美展 in 薩摩	審査員特別賞	志賀 英二		学 94 卒
	金沢市工芸展	奨励賞	五十嵐智一	『響』	学 95 卒
	酒盃台展	優秀賞	宮尾洋輔	『tou』	学 97 卒
	第 36 回神奈川県美術展	平面立体部門特選	小林秀幹		院 98 卒
	第 36 回神奈川県美術展	美術奨学会賞	藤井志帆	『Untitled T00-001A2』	院 02 卒
2001年度	第 1 回現代ガラス展 in おのだ	審査委員賞	塩谷直美		院 86 卒

IV. 教育研究

	第3回現代ガラスの美 展 in 薩摩	審査員特別賞	塩谷直美		院 86 卒
	第39回朝日陶芸展	秀作賞	古川敬之		学 93 卒
	21世紀アート大賞	熊本放送賞	留守玲	『Dear diary』	院 02 卒
2002年度	第2回 KOGANEZAKI・器 のかたち・現代ガラス展	日本ガラス工芸協会 賞	神田正之		学 82 卒
	日本現代ガラス展・能登 島	銀賞	志賀 英二		学 94 卒
	第8回 ものづくりコ ンテスト 高専・大学の 部	文部科学大臣奨励賞	磯 瑚子		学 03 卒
	第38回神奈川県美術展	平面立体部門 県立 近代美術館賞	松永明子	『時間の音』	現院 2
	第39回神奈川県美術展	美術奨学会賞	河上由武	『玉座』	学 02 卒
	第2回 KOGANEZAKI・器 のかたち・現代ガラス展	奨励賞	征矢 真由 子		学 04 卒

学生・卒業生の受賞歴（表 -3）

大賞以外

④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員は入学時の基礎的指導から大学院生の指導までを受け持ち、その他の事務的業務も助手・副手の力を借りながら行う。非常勤教員は主として学部の高学年の指導にあたる事が多く、その指導に必要と思われる適切な人材が配置されており、1年ごとの契約更新が行われている。

⑤学科運営の意思疎通

カリキュラムの検討など学科内では月に一度の学科内会議の席上で行われるが、それぞれの研究室を訪ねての意思の疎通が頻繁に行われている。

⑥研究活動

立川市との間で公園に設置するオブジェクト制作が2002年度に行われ、また2003年度には東京造形大学・女子美術大学とも共同して江戸川区との間で伝統工芸師／学生プロジェクトが行われた。参加学生は他大学の学生との交流、ならびに伝統工芸の仕組みを知る機会となった。

⑦就職支援

各自が制作を続けられるよう工房等の紹介を行っているが、仕事の性格上、就職状況は困難であるのは否めない。カリキュラム上にデザインにも則した課題を取り入れ、ポートフォリオの制作指導などを行っている。また教職課程を取る学生にはそのための猶予を与えている。

⑧ 課題

本来は他学科が第一志望であったが、「入学できたのは工芸学科だった」との学生を指導することは困難を伴う。これは本学の知名度によるのだが、この事実を勘案し、積極的に工芸分野を目指す学生を受け入れられるよう新しい入試を行う予定にある（2005年度入試予定）。

グラフィックデザイン学科

① 教育目標

日々、進展、変化する情報化社会の中で、人々の生活環境やグラフィックデザインを取り巻く環境も急激に変化しつつあり、ビジュアル・コミュニケーション・デザインの役割は一段と重要になって来ている。このような現状から、深い人間性に根ざした豊かな感性、創造、発見、計画する力を基礎とし、描写、構成、情報伝達技術などの造形力を持ち、併せてデジタル機器による巧みな情報処理技術を保有する、創造性や問題解決能力が高い、実践的かつ進歩的なグラフィック・デザイナーの育成が本学科の目標である。そのために60数年に及ぶ伝統と実績の下に、これまでの教育を充実、高度化し、さらにコンピュータや映像などの教科目を加えて学科を構成している。アナログとデジタルの両面に均衡のとれた発想と技術、広い視野と高い教養、理論などを学ぶこととしている。

[現状の報告]

コミュニケーションデザインの本質を軸に、内容の充実を志向している。そのことが結果として、最先端分野を拡充していくという好循環の構造につながっている。このことは少子化現象に対して危機感を持たねばもつほど重要視される。

1, 2年次で基礎的力を身につけ、3, 4年次で複合的に科目選択が可能なカリキュラム構成をとっている。

分野別では、広告 105・表現 65・伝達 20 名程の比率でコースに所属し、分野の選択は、学生の希望に沿って行われている。

それらを補う意味で、産業界において第一人者として活躍中の卒業生を中心とした特別講師を、年数回招いて第一線の現場からの刺激を与えている。特別講義は、他学科を含め平均 300 名ほどの学生が受講している。熱気溢れる講義が行われ、学生の評価も高い。

あくまでもデザイン教育がどうあるべきかを中心に据えて、大学として正攻法の改革を行っている。

[評価と課題]

A) 良い点

2年から3年に進級する際、28科目すべてについて1週間通してのオリエンテーションを行っている。基礎課程から専門課程への橋を架ける時間と捉え、自分の進む道を真剣に考えて欲しいということと、自分の選択する以外の分野への理解を深めてもらうことが狙いである。

本学科での一連の取り組みを分かりやすく説明するために、受験生向けフライヤーでは、カリキュラムの全貌が分かるように工夫している。学年を追って、誰が、何を、どんな意図で教えてくれるのかをダイアグラム化（マップ化）して示している。

合格者の質を上げ、実質の難易度を高めるために、レベルの高い入学者を確保するよう努めている。そのために採点日を増やす等、教員一丸となって努力をしている。

本学科も近年、社会貢献活動として、産官学共同研究を実施している。

B) 改善したい点

理論系科目の拡充が進んでいない。教員数の枠の問題もあり難しい。今後、各コースともに、研究分野に力を入れたい。

②カリキュラム構成

[現状の報告]

カリキュラムの考え方

基礎課程においては、ビジュアル・コミュニケーションの視覚化への技術習得を目的として「手」による表現手法による描写力、構成力の獲得とともに、コンピュータ等機材を介した表現手法を学び、併わせてデザイン基礎理論の習得を目指す。

専門課程では、ビジュアル・コミュニケーションにおける各専門分野についての表現手法と理論を一体化して学ぶことを目指し、専門コースを設けて、より専門性の高い講座内容を提供し、一方では各専門分野を跨ぐ科目選択のシステムにより、多面的な視点を持った学生の指導を行う。

グラフィックデザイン学科の現状の教育課程は次の通りである。

教育課程

■グラフィックデザイン学科基礎教育科目

□1年次／基礎造形Ⅰ、基礎造形Ⅱ、立体造形Ⅰ

□2年次／基礎デザインⅠ、基礎デザインⅡ、写真、タイポグラフィ基礎実習、立体造形Ⅱ

■グラフィックデザイン学科専門教育科目

□3年次

広告コース／広告計画Ⅰ、広告映像Ⅰ、アートディレクションA-I、アートディレクションB-I、アートディレクションC-I、グラフィッククリエイションA-I、グラフィッククリエイションB-I、CMクリエイションⅠ、CI計画Ⅰ、パッケージ・デザインⅠ、セールスプロモーションⅠ、WebディレクションⅠ

伝達コース／視覚言語デザインⅠ、コンピュータ・グラフィックスA-I、コンピュータ・グラフィックスB-I、インフォメーション・デザインⅠ、エディトリアル・デザインⅠ、タイポグラフィⅠ

表現コース／表現デザインⅠ、広告写真Ⅰ、写真Ⅰ、イラストレーションA-I、イラストレーションB-I、アニメーションA-I、アニメーションB-I

□4年次

広告コース／広告計画Ⅱ、広告映像Ⅱ、アートディレクション A-Ⅱ、アートディレクション B-Ⅱ、アートディレクション C-Ⅱ、グラフィッククリエイション A-Ⅱ、グラフィッククリエイション B-Ⅱ、CM クリエーションⅡ、CI 計画Ⅱ、パッケージ・デザインⅡ、セールスプロモーションⅡ、Web デイレクションⅡ

伝達コース／視覚言語デザインⅡ、コンピュータ・グラフィックス A-Ⅱ、コンピュータ・グラフィックス B-Ⅱ、インフォメーション・デザインⅡ、エディトリアル・デザインⅡ、タイポグラフィⅡ

表現コース／表現デザインⅡ、広告写真Ⅱ、写真Ⅱ、イラストレーション A-Ⅱ、イラストレーション B-Ⅱ、アニメーション A-Ⅱ、アニメーション B-Ⅱ

全コース／卒業制作

■グラフィックデザイン学科専門教育科目（学科目）

コンピュータ基礎概論、印刷概論Ⅰ、印刷概論Ⅱ

グラフィックデザイン学原論、広告史、広告表現論、広告コンセプト、English in Graphic Design、ビジュアルデザイン論、広告コピー論、広告原論

■ワークショップ

シルクスクリーン、描写、CG 基礎実習

■共通基礎教育科目・共通専門教育科目

外国語科目、演習科目（ゼミ）、他

[評価と課題]

2004年度より、写真系講座（清水行雄・十文字美信）、Web デザイン系講座（福井信蔵・福田敏也）、アニメーション制作系講座（斉藤紀生）を充実予定。今後も更に拡充すべき分野と考えている。

前述した通り、理論系科目の拡充が進んでいない。充実のために、ビジュアルデザイン論、広告コピー論など、2005年度以降開設を予定している。さらに、本学科において必要な理論系科目の内容の構成を検討しながら、より発展をはかりたい。

③教育効果

本学科の基礎課程、専門課程の制作実習を経た学生は、産業界におけるビジュアル・コミュニケーションの分野に進出していくが、特に広告デザイナーの育成に顕著な成果が見られ、我が国の広告界におけるデザイナーの先達となっている卒業生の下で、近年も多くは広告賞を受賞する広告デザイナーを輩出している。広告デザインの制作実習は、マーケティング理論、広告表現理論と表現計画を一体化した指導であり、実証的な手法を駆使するデザイン教育を目指したことによる成果である。

また、描写力に重点を置いた教育により、アニメーション、イラストレーションのクラスの卒業生に優れた作家が出ている。デザイン研究では、グラフィックデザインと他分野

(情報デザイン、環境デザイン) とのコラボレーションが進み、特に大学院博士前期課程(修士課程)において研究成果が見られるようになって来た。

④専任教員と非常勤教員の役割

本学科では実技科目においては各学年の指導は、まず専門分野に専任教員が配され、非常勤教員がサポートするといった組み立てである。基礎課程における描写系専任教員、構成系専任教員、映像系(写真、アニメーション)専任教員が各2名を基準に配され、そこに非常勤教員が付くことになる。専門課程も同様に、各専門コースには広告コースの6名、伝達系2名、表現系4名の専任教員がカリキュラムを造り、コースを運営し、非常勤教員がサポートしている。

理論系については、専任教員が担当する例は増加しているが、外部の研究者が非常勤教員として専門の科目を担当している。

生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻

先進性と独自性・・・(学科の理念)
自由と意力・・・(大学の理念)

①教育目標

「世界に通用する自立したデザイナーの育成」

目標を達成するため、入学、教育、進路の各過程において、2001年に5カ年計画を立案し2002年4月より実施している。

A) 入学

「ブランドを上げ、入試倍率アップを目指す」

イ. プロモーション(情報発信)

- ・学科用シンボルマーク(2001年度)、パンフレット(2002年度) ファカルティー(2003年度)の作成
- ・グッドデザイン賞イニシアチブ展参加と産学作品企業内展示の実施(2002年度ー)
- ・産官学共同研究の外部展示の積極化(2002年度ー)

[評価・課題]

- ・グッドデザイン賞イニシアチブ展では、高校生や予備校生の来場者が増加。
- ・2003年度のホンダとの産学がドキュメンタリー番組に取り上げられた。

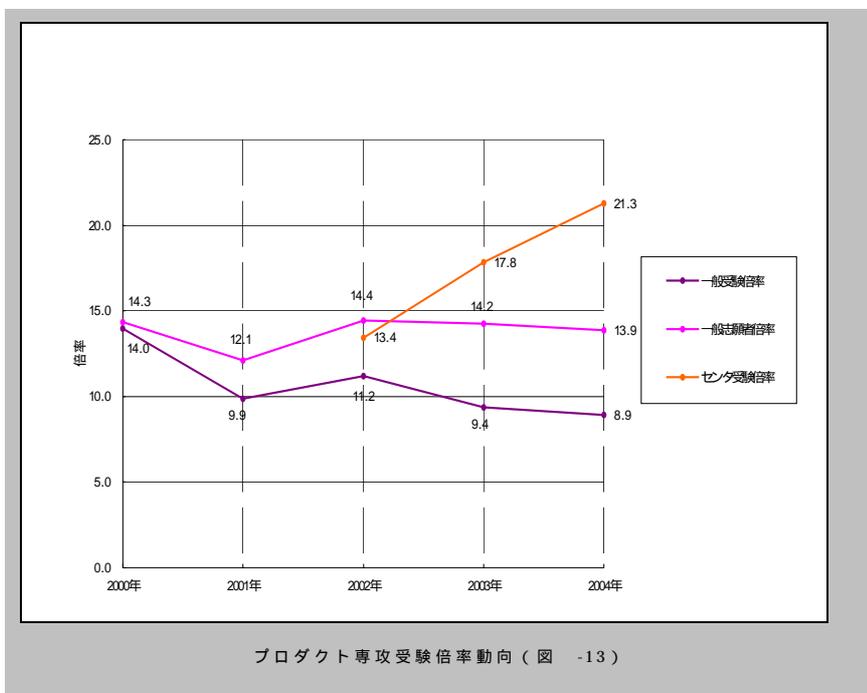
ロ. 入学試験(図I-13参照)

- ・大学入試センター試験の導入(2002年度ー)
- ・実技試験問題の目的の明確化
デザイン:色鉛筆導入(2002年度ー)独創性、発想力、表現力を審査。

デッサン：モチーフの形体、構造、材質の表現力の審査に焦点を絞る。

[評価・課題]

・大学入試センター試験の受検倍率の増加（13.4倍から21.3倍へ）は、併願による確実合格を目指す受検者の増加を示していると考えられる。



B) 教育 「世界のプロダクトデザイン教育を先導する」
イ. カリキュラム

・プログラムの目的別分類と目的の明示化（表 I -4 参照）

各学年のプログラムをメインプログラムとサポートプログラムに分類。

メインプログラム：総合的なデザイン学習が段階的に行えるよう構成。

サポートプログラム：デザインに必要な知識や技術を専門的に教授。

	1年		2年		3年		4年	
	デザインの楽しさを知る		デザイン表現技術の習得		デザインプロセスの修得		デザインの実践と応用	
	メインプログラム	サポートプログラム	メインプログラム	サポートプログラム	メインプログラム	サポートプログラム	メインプログラム	サポートプログラム
	基礎デザイン1	デ基礎デコ生カ ザ機ザン産ラ イ写イビ技 ン真ン術リ ス演図ン ケ習面タ ツ チ 1	基礎デザイン2	デ応フアアブブビ ザ用オイロレロジ イ写ルデダゼダ ン真ムアクンクア ス演 デテトル ツ 習 イデ 英シ チ ベザン 語ン 2 ロイヨ キン ツン ブ概 グ メ論 ン ト	プロダクトデザイン1	一デ知 般ザ的 デザイン財 ン産 イ経権 ン営 概論	プロダクトデザイン2	
1	プロダクトデザインの理解と目標設定		空間とモノの関係		試行錯誤する		前期課題	
2	造形トレーニング		身体とモノの関係		他者へ配慮する		卒業制作	
3	構造の理解		特定の人のためのデザイン		夢をカタチにする			
4	機能の理解		不特定多数のためのデザイン		環境に配慮する			

(表 -4)

※2002年度より実施。毎年チェック、改訂を行い、ローリング作業を実施（2004年度版）

- ・ 社会との積極的連携
産学共同研究の積極化
「サロン TAMA・P」（他分野で活躍する卒業生との交流の場）の開設（2003 年度～）
- ・ プログラムの連携強化
「連携シート」の導入（2003 年度～）：他教員のプログラム進捗状況の把握
- ・ 知的財産の有効活用
「学生作品アーカイブス」の構築（2003 年度～）：学生作品のデジタルデータ化
- ・ 自立心の向上
「学生管理グループ」の設置（2002 年度～）：学生主体で実習室、工具類を管理

[評価・課題]

- ・ プロダクトデザイナーに求められる知識や技能の多様化に即したカリキュラム作りが必要と考えている。（インターフェイス、ユニバーサルデザインなど）
- ・ 産学共同研究では、学生作品が商品化されるなどの成果を上げている。
- ・ サロン TAMA・P では多くの学生が参加し、卒業生と交流を深め、自らの指標を考えるきっかけとなった。より活発な交流を計るため、2005 年度設立を目標にアーバンサロンの設置を目指している。
- ・ 連携シートにより、他教員のプログラムを意識できるようになったため、全体性をもった指導が可能になった。
- ・ リニューアル版ホームページで学生作品アーカイブスを活用（2004 年度予定）。

ロ. 指導方法

- ・ 専任教員と非常勤教員の役割の明確化
専任教員（4 名）：学科長、大学院教務主任、教務主任、対外担当で役割を明確化。
非常勤教員：専門の異なるデザイナーが、幅広いプロダクトデザイン領域に対応。
- ・ 3, 4 年次チーム指導の実施
毎日異なる教師が指導にあたり、プロの現場に近い環境を作り、実践的教育を実施。
- ・ 中間カリキュラム会議の開催（2003 年度～）：問題抽出の迅速化、次年度への対応。

[評価・課題]

- ・ 頻繁に教師が顔を合わせる機会を設けたことで、連携指導がスムーズになった。
- ・ 各プログラムの進捗状況、学生の理解度の把握などプログラム全体を客観的に観察し、具体的に評価し、統括的に管理する仕組みづくりが必要と考えている。

ハ. 環境整備

- ・ ワンウェイ方式からツーウェイ方式の講評会へ（2001 年度～）
講評を聞く学生から教師の表情が見えるように、講評会のレイアウトを工夫。
- ・ 教授室の廃止、研究室大部屋制の導入（2001 年度）

[評価・課題]

- ・学生の出入りが自由な大部屋制の研究室によって、教師と学生間の開かれたコミュニケーションが容易になった。
- ・専任教員の研究作業の場、非常勤教員の休息の場、参考品保管などを考慮すると現状の研究室ではスペース的に限界がある。

②進路 「個性を活かしたマンツーマン指導の実施」

A) 就職支援

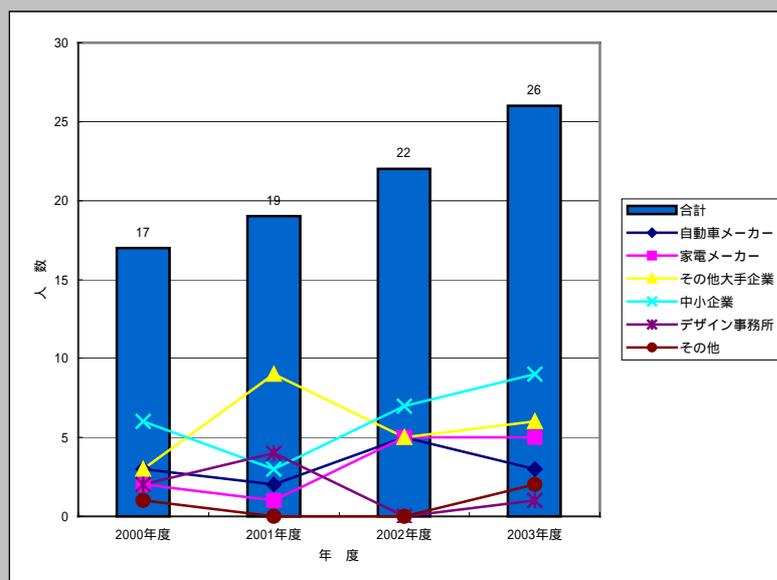
- ・就職担当教師に就職情報を集約。
- ・マンツーマン指導：ポートフォリオ制作方法、面接の心得などを個別指導。

[評価・課題]

- ・求人数が減少している中、本学科の就職率は向上している。(表 I -5 参照)
- ・中小企業やデザイン事務所への就職者が増加傾向にあるのに対して、自動車メーカーや家電メーカーを含む大企業への就職者は減少傾向にある。(図 I -14 参照)
- ・近年は大手企業が実施している企業実習において苦戦を強いられている。学生の就職希望先の多様化や、企業や社会が求める人材と本学科で教えているスキルとのギャップなどが原因と考えられ、「会社訪問」などによる調査や分析が急務である。

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
学生数	27	27	26	32
就職内定者数	17	19	22	26
就職率	63%	70%	85%	81%

(表 -5)



プロダクト専攻就職先動向 (図 -14)

B) 進学

- ・本学大学院、他大学を含め、進学希望者は年1、2名程度である。

[評価・課題]

- ・プロダクトのデザイン現場では、スケッチや造形力といった従来型の基礎技術以外に、マネジメント力、ビジネスセンス、ユニバーサルデザインやインターフェイスデザインに関する知識など、より高い能力が求められるようになって来ている。
- ・そのため、今後は大学院の充実、社会人大学の可能性など、基礎的スキル以外の教育環境の充実が課題となっている。

③総合

着実な成果を見る中、上記3つの過程（入学、教育、進路）を充実させ、5カ年計画を強力に推進していく上で作業スペースの確保と指導陣の充実が急務と考えている。

生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻

①教育目標

ひとにもっとも身近である繊維。繊維を使用するあらゆるデザイン活動がテキスタイルデザインの領域である。人間は生を受けたその時から布地に包まれ、そして布地に包まれ生を終える。テキスタイルと生活環境との密接な関係は原始の時代から現在まで、また未来においても不変である。生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻においては、その重要な繊維のあらゆる可能性をこれまでの創造概念を超え追求する。

多様化する繊維は、テクノロジーの進化とともに日々巧妙に設計され変貌している。ウェア、ファニチュア、インテリアスペース、また医療、通信、宇宙まで、従来の狭義な解釈ではくくりきれない領域へと広がりを見せている。新しい時代と世界に向けてのテキスタイル文化の担い手として、クリエイティブな社会性と個性を備えたデザイナー、未知の造形を求めるテキスタイルアーティスト、心と技を継承、新技法を開拓するクラフトマンなど幅広い視野と豊かな感性を持つ人間性の育成を行なう。新しい角度からのアプローチを試み、十分な環境、設備のもとで教育の課程を学ぶ。

生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻においては創造からプロダクトへ展開する可能性をも追求する。過去の偉大な伝統染織からの啓示と尊重を基にした知識や技法の研究、習得は、現代に適応するカルチュアやインダストリーへの不可欠な基礎知識となる。また地球にとって重要なテーマである環境への負荷がより少ないエコマテリアルの開発を学ぶことも領域内の今後の重要な課題である。

また、企業からの依頼に応え、教員指導のもと学生が応じる産学協同研究も充実した内容で評価を得ている。

②カリキュラム構成

〔実態〕

1998年度の改組転換において生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻では、従来の教育内容を継承しつつ現代に適応する知的クリエイターの養成を目的としたカリキュラムが編成された。専門教育科目において多様化する学生の要求と社会変化に対応する実践的内容を持ったカリキュラムとして2002年度よりウェアテキスタイルI（3年次）選択科目、2003年度にはウェアテキスタイルII（4年次）選択科目として新しく組み込まれた。また、2002年度よりコミュニケーション概論（3年次）はビジュアルシンキングI、パターンデザインI（2年次）は2003年度より基礎テキスタイルデザインに変更し、よりデザイン基礎力を強化し、単位数を2単位（実技）→4単位（実技）に変更した。コミュニケーションデザイン（2年次）は2003年度よりデザインプレゼンテーションとし、新しくプレゼンテーションデザイン力を養うため、実習から講義科目へと変更した。

	<u>2002度</u>	→	<u>2003度</u>
新規科目	ウェアテキスタイル I 3年次選択 / 2単位（実技）		ウェアテキスタイル II 4年次選択 / 2単位（実技）
変更科目 (名称・単位数・他)	コミュニケーション概論 3年次 / 2単位（実技）		ビジュアルシンキング I 2単位（実技）
	パターンデザイン I 2年次 / 2単位（実技）		基礎テキスタイルデザイン 4単位（実技）
	コミュニケーションデザイン 2年次 / （実技）		デザインプレゼンテーション （講義）

〔現状〕

テキスタイルデザインは幅広い領域を担う分野であり、カリキュラムの編成に対しては、十分討議したうえで決定している。他大学より本学科へカリキュラムの問い合わせも多数受けていることから十分評価がなされていると思える。専門教育科目（実技科目）と共通教育科目（教職・学芸員資格科目を含む）との時間割の重複が2000年度より特に問題となったが、他学科の学生も履修出来るようにオープン科目として時間割を変更するなど対策しているが、まだ検討の余地が考えられる。これからもテキスタイルデザインの可能性を最大限に生かす教育を実現するために努力したい。

③教育効果

テキスタイルデザイン専攻の傾向として、学生の意識には就職を希望するものも多い。そのため実社会での要望に対し、即座に柔軟な行動が可能となる教育に目標を置いて来たが、少しずつ効果が現れている。特に3, 4年生は実社会でのデザインの現状のシュミレーションしつつ、課題として充実した授業内容で、各企業の開発担当者や経営者の連鎖講座から学ぶことで現場の緊張感を体験させ、意識の向上をはかって来た。機材も市場で使

用されるものと同様の機種で教育をしているため、手技の習得と同様にプロダクティブな機材も使用が可能になった。オリジナル性の高い創作活動を目的とする教育は過去から十分に浸透しているため、その力を社会でより発揮できるよう、実社会で活用されるデザインを追求する教育を目指している。さらに自己の創作活動を十分に表現できるプレゼンテーション力向上のための授業も行って来た。

卒業生の進路としては、ファッションテキスタイル、インテリアテキスタイル、素材メーカー、車両メーカー、商社、アパレル企業など、テキスタイル関連企業でデザイナーとして就職するものが多い。なかには更なる研究を目指し大学院へ進むもの、海外留学するものや、自身で創作活動を志すものなど多彩な人材を輩出しているのがテキスタイルデザイン専攻の学生の現状である。

④ 大学院

大学院においては、2002年度の大学院改革に伴い、実技科目として大学院博士前期課程（修士課程）デザイン専攻のなかに、『テキスタイルデザイン研究』および、『テキスタイルアート研究』の二つの講座を設けた。その後、実情に照らして2003年度より、『染織研究』と『テキスタイルデザイン研究』に再編成し、学術的な教養だけに偏らない実技研究の充実を目指している。また、学生の研究領域選択にきめ細かな対応をするため、各研究科目で担当教員の得意な専門分野を明確化し、指導を分担している。今後、国際的視野を持ったアーティスト、研究者、教育者の育成と共に、高度情報化社会に対応して、インハウス、フリーランスデザイナーとして活躍できる人材育成を行っている。

⑤ 専任教員と非常勤教員の役割

テキスタイルデザイン専攻の授業における、専任教員と非常勤教員の役割の現状を分析すると、まず、実技科目では主に専任教員が担当し、非常勤教員は補完的な役割を担っている形と、講義・演習科目では、非常勤教員が単独で1科目を受け持つ形の2つに分けることができる。大きな教育方針と目標を専任教員がたて、より専門的な知識や技術を非常勤教員が担当する現在の状況はテキスタイルの合理的且つ網羅的な教育の実現を可能にしていると考えられる。この専任教員と非常勤教員の役割分担で不十分な点は、主に実技科目における染織の多様な特殊技術の指導体制の実現にあると考えられる。前回の自己点検・評価の課題で示した内容とは少々矛盾するが、2001年度頃からは半期または通年担当の非常勤講師よりも、むしろ、ピンポイントで特殊な技術の指導を担当してもらえる臨時講師に依拠することが多くなっており、このような形態をとって、不十分な点を補っているのが現状である。

⑥ 研究活動

実施年度	研究名	対象学年	相手先	内 容
2001年度	「秩父ちぢみの季節限定商品から解放するデザイン研究開発」	3年生	(財)中小企業総合研究機構	デザインコース3年生が「ちぢみ」の生地を産地より供給され、様々な商品アイテムをデザインした。
2002年度	「有田プロジェクト」	大学院生	(財)中小企業総合研究機構	環境デザイン学科の3年生と当学科卒の大学院生が窯元に宿泊して新商品開発をした。
2003年度	「新業態のプロデュース」	3年生	富士シティオ(株)	環境デザイン学科の3・4年生と本学科デザインコースの3年生が共同で新業態としてスーパーマーケットの要素を取り入れたコンビニの開発をした。
	「Gradessの市場開拓の可能性を探る」	2年生、3年生	(株)マーケティングマジック	クライアントからの転写紙制作用機器一式を移譲され、アルミ・ステンレス等を使用して新しい市場向けのホワイトボードを提案した。
	「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」	2・3・4年生・大学院生	江戸川区	女子美、造形大学と本学の学生が江戸川区に残る伝統工芸の新たなデザインの試みをした。

(表 -6)

[実態]

各担当教員が学生を不特定で募るケース、授業に組み入れるケース等様々である。契約金の使途も各担当教員が管理している。

[現状評価]

学生は積極的に取り組みモチベーションも高く、社会でのデザイナーの役割を理解するには良い機会である。

[不十分な点]

学生が熱中し過ぎて、通常の授業を怠るケースがあり今後は可能な限り授業の範囲で行うことが良い。また、各授業の担当者との話し合いの必要がある。

環境デザイン学科

①教育目標

『環境をデザインする』

環境デザイン学科では、「環境」を「人の知覚対象のうち、他人と共有することのできる範囲」と定義している。その「環境」を「三次元空間」として広くとらえデザインすること。これが本学科の教育範囲になる。

スケールから見ても、「環境」はディスプレイ、ファニチャー、インテリアといった小空間から、建築、都市空間までをも網羅している。それらをデザインする姿勢を身につけるためには、からだ全体で環境を受け止め、体験を通して自然や人間社会のなかにある問題を見出すことが必要になる。このプロセスにおいて、プロポーションやバランス、色彩感覚といった美学的要素のみならず、サステイナブルデザイン、ユニバーサルデザインといった社会学的要素からも問題提起がなされ、答えを探求しなくてはならない。

環境デザイン学科では、徹底的な現場・原寸主義と、CAD・CGを駆使したモニター上でのシミュレーションとの両面から、「手」で考え、デザインする姿勢を身につける。「学ぶ」とは知識の積み重ねだけではない。講義と実践を通してさまざまな視点を養い、自らの興味を掘り下げ、実技としてかたちにしていく。

学生は4年間を通し、自分の意志で「インテリア」「建築」「ランドスケープ」の三つの系から自由に課題を選択できるようになっている。強い意志と実行力や組織を指導する力を養い、同時に光や風を感じ取ることのできる感受性をもった学生を教育している。

②カリキュラム構成

A) 環境デザイン学科の3つの柱

「講義・演習・実技課題」の3つの柱によってカリキュラムは構成されている。

講義は知識を蓄え、演習は手で覚え、実技課題では、自らの考えをかたちにする。

B) 系の所属と実技カリキュラムの自由選択制

実技は、1年次に幅広く環境デザインの基礎を学び、2年次からは各自の適性と興味に合った「インテリアデザイン」、「建築デザイン」、「ランドスケープデザイン」のいずれかの系に所属し、少人数でより専門的なデザインを学ぶ。実技はこの3つの系と共に「産学共同プロジェクト」を合わせた4つを柱としてカリキュラムを構成している。

3つの系と産学共同の各課題は、いずれも本人の希望で自由に選択でき、各自は2, 3年次に系を横断して独自のメニューを作ることになる。それぞれの系の課題を自由選択することで、柔軟なデザインを学ぶことができるのが環境デザイン学科の大きな特徴である。

3つの系の学生所属比率はインテリア3：建築2：ランド1である。

◎インテリアデザイン系

外部環境から守られた室内空間は、五感全てにおいて自由に開かれ、それらを構

成する素材の可能性は、本学科の中でもっとも広いものである。身体に最も近い感覚－肌触り、色合い、音の響き、明暗、座り心地、居心地などを頼りに、家具、空間演出、室内環境簿についてデザイン室、工房、CAD 室などを使いながらインテリアデザインを学ぶ。

◎建築デザイン系

建築は空間に秩序を与え、人々はこの空間によって秩序づけられる。この建築を工学面からだけでなく、使う人間に優しい本来のデザインの意味と、構造に裏付けられた造形としての建築デザインを学ぶ。インテリアデザインは建築に包括され、ランドスケープデザインは建築を包括することから、この系はそれぞれを統合する役目をもっている。生活のデザイン、機能のプログラミング、プランニング、構造デザイン、ディテール、素材などについて、図面、CAD、模型制作等の実技を通して学ぶ。

◎ランドスケープデザイン系

本学科の内容を最も大きなスケールでとらえながら、繊細な自然や都市の現象に敏感に呼応する感受性をもってランドスケープデザインを学ぶ。太陽の動き、月の明り、風の薫り、水のゆらぎ、地形のうねり、土の匂い、石の重さ、木々のざわめきなど、さまざまな外界の諸現象のなかでどのようなデザインが可能なのかを、戸外でのフィールドワークや実測や演習を通して考える。

③教育効果

A) 手で学ぶ

本学科では、徹底的な現場・原寸主義と、CAD・CGを駆使したモニター上でのシミュレーションとの両面から「手」で考え、ものをつくる文字通り身をもって環境デザインの意味を探ることに重点を置いている。

- ・ハイテクからローテクまでのバランス教育の強化を図る。
- ・原寸と共に、図面表現能力の強化をはかる。

B) 問題解決能力

本学科では、問題解決能力を養うことを重視している。これは、環境デザインに課せられた複雑なプログラムを読み解く課題や、産学共同を他学科と一緒に取り組み、社会に求められるデザインのニーズを探求することで身につけていく。

C) 生きたデザインとしての産学共同

本学科に入学する学生は、80%近くが本学科を第一志望として入学をしている。予備校や受験生への積極的学科紹介が功を奏し、また学生を主体としてカリキュラムに組み込んだ産学共同の積極的取り組みによる知名度も上がって来ている。

④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員は学科の基本方針を策定し、学科の運営と実技指導と専門科目の講義にあたっている。実技系非常勤教員は、社会で活躍する第一線のデザイナーを多く配し、最新のデザイン教育の指導にあたり、また講義系非常勤教員にも各専門領域の第一線の研究者や実務者を配し指導にあたっている。

⑤学科運営の意思疎通

専任教員は学科内会議を月2回おこない、学科内で進行しているカリキュラムの問題点を検討し、学生一人ひとりの課題取り組みや学習状況等を把握し、問題があれば速やかに対処している。

⑥大学院

A) 大学院の3つの柱

環境デザイン領域の大学院は、「環境デザイン」、「家具デザインの制作と研究」、「産学公共同プロジェクト」の3つの領域からなる。

B) 大学院の教育と研究

環境デザイン領域の大学院は、本学科の学部と縦につながりながら、上記の3つの領域が研究や創作を行っている。

実技指導は本学科の教員が学部1年から大学院までを一貫して指導にあたっている。各領域の研究テーマは、本学科の学部の特徴をより専門化したものである。

⑦研究活動

A) 産学共同研究

研究室の教員が個人的なつながりで行う理工系の産学共同と違い、多くの学生の感性を引き出しながら学生を前面に押し出し、学生の自主的な問題の掘り起こしから解決を導き出す形で産学共同に取り組み、これらをカリキュラムに取り入れている。

年間を通じて数件の産学共同がカリキュラムとして学生に提供されている。学生は大変熱心に産学共同に取り組み、社会の仕組みとデザインの密な関係を学んでいる。また、他学科とも積極的にチームを組み、本学科がプロデュースする立場で産学共同を行うケースも年々増えて来ている。

実施年度	研究名	対象学年	相手先	内容	請負内容	受賞名
2000年度	【紙のイスたち】	3年 (2学科合同)	㈱伊万里大國段ホール	新商品提案	デザイン	
	【I Mac meets air】	2年	T.D.W.実行委員会 協力:アガ'ルコビ'ユ-ター(株)	イベントプロデュース	デザイン・制作・施工	サインデザイン賞入選 1
	【T.D.W.2000 チェコッティブース】	3年	チェコッティ・コレツィオーニ	展示ブースデザイン	デザイン・制作・施工	1
	【新しいIMOS BURGER_2000】	2・3年	㈱モスフードサービス	店舗デザイン	企画・デザイン	
	【鎌北湖プロジェクト】	3年	埼玉県毛呂山町	ランドスケープマスタープラン	デザイン	
	【壁プロジェクト_3『言語連鎖の壁』】	3年	協賛:外務省	ワークショップ(ドイツ・ハンブルグ市)	デザイン・制作・施工	サインデザイン奨励賞
	【火夜】	2年	(財)公園緑地管理財団/国営昭和記念公園	イベント空間演出	デザイン・制作・施工	ディスプレイデザイン賞入選 1
【うちわでBOMB】	2年	岩手県安代町役場	ワークショップ	インスタレーション		
2001年度	【八王子みなみ野 シティフェスタ2001】	3年	住宅都市整備公団	イベント空間演出・ビジュアルデザイン	デザイン・施工	ディスプレイデザイン賞入選
	【誠美保育園】	3年・環境設計室	(社)誠美福祉会 誠美保育園	園庭改修工事設計業務	企画・設計・監理	
	【ユニバーサルデザイン提案】	3年	三井ホーム(株)	デザイン提案	デザイン	
	【100のすわり展】	1年	T.D.W.実行委員会	展示総合プロデュース	デザイン・制作・施工	1
	【バルーンフラッグ】	2年	T.D.W.実行委員会	サイン計画	デザイン・制作	サインデザイン準優秀賞 他 1
	【be Sure 展示ブース】	3年	トソー出版(株) be Sure編集部	展示ブースデザイン	デザイン・制作・施工	ディスプレイデザイン賞入選 1
	【新しいIMOS BURGER_2001】	2・3年	㈱モスフードサービス	店舗デザイン	デザイン	
	【亀戸サンストリート】	3年	㈱タイムクリエイト	ストリートファニチャーデザイン	デザイン	ディスプレイデザイン賞入選
【雪灯り】	2年	安比高原温泉協会・㈱東広社	空間演出	デザイン・制作・施工	サインデザイン準優秀賞	
2002年度	【Flower & Garden display design project】	4年・大学院	イオン(株)	新業態店舗デザイン	デザイン	
	【サイバーシティ八王子ロゴデザイン】	3年	八王子市商工会議所	ロゴデザイン	デザイン	
	【ウインドウディスプレイ】	2・3年	ベネトンジャパン(株)	ディスプレイデザイン	デザイン	1
	【すわるかたち展】	1年	T.D.W.実行委員会	展示総合プロデュース	デザイン・施工	1
	【新業態のマスタープラン提案】	2・3年 (3学科合同)	富士シティオ(株)	新業態店舗デザイン	デザイン・総合プロデュース	
	【2002版パンフレット】	3年	㈱まちづくり三鷹	パンフレット制作	デザイン	
	【有田プロジェクト『有田焼への提案』】	3年	(財)中小企業総合研究機構	新商品提案	デザイン	
【高齢者の暮らしと生活空間の提案】	3年	三井ホーム(株)	デザイン提案	デザイン		
2003年度	【平塚店基本計画】	3・4年 (3学科合同)	富士シティオ(株)	店舗・サイン・アプリケーションデザイン	デザイン・総合プロデュース	グッドデザイン賞 新領域デザイン部門(内定) 9,18
	【新業態のマスタープランの提案】	2・3年	㈱スリーエフ	新業態店舗デザイン	デザイン・総合プロデュース	
	【新しいコンテンツ・サービスの提案】	2・3・4年 (2学科合同)	スリーエフ・オンライン(株)	e-Towerコンテンツ・サービス提案	企画・デザイン	
	【えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト】	3年 (3学科合同)	江戸川区産業振興課	新商品提案	企画・デザイン	
	【高齢者の暮らしと生活空間に関する提案】	3年	三井ホーム(株)	デザイン提案	デザイン	

受賞年度	受賞名	氏名	作品名
2001年度	東京建築士会住宅課題賞 優秀賞受賞	鈴木清巳	
	第38回 SDA賞 準優秀賞	井村芳生、内田名美、江尻麻紀、佐久間俊之、須川悠理子、須藤慶一、成田陽子、堀田玄樹、吉田節	TDW オフィシャルサインバルーンフラッグ
	第38回 SDA賞 奨励賞	河合隆平、橋本英和、吉富寛基	光の小路
2003年度	6th OISTAT THEATRE ARCHITECTURAL COMPETITION 2003	大室 佑介	The Egg
	SXL コンペ大賞受賞	熊切真知子	光源氏の家
	銀座ショウウィンドウコンペ 銀座かねまつ賞	大西恵美	
	銀座ショウウィンドウコンペ 資生堂賞受賞	和久紗枝	
	ヘティヒコンペ 2等受賞	溝淵匡史	
	シェルター学生設計競技 2003 入選	大室 佑介、松村 和典	きりかぶハウス
	ohyama future competition 2003 最優秀賞	今泉 泰昌	kids-wall

(表 -8)

SDA - スペースデザインアソシエーション

DDA - ディスプレーデザインアソシエーション

⑧ 就職支援

毎年本学科の卒業生を就職相談会にゲストとして招き、直接のリクルートをはじめ、在学生の就職活動全般のアドバイスをおこない、卒業生と在学生の交流を密にはかっている。

⑨ 課題

本学科は、特色ある教育内容が受験生や高校、予備校に周知され、受験倍率も毎年高いが、これからは美術大学として「環境デザインという領域」をどう体系化していくか、また、社会に「環境デザイン」の重要性をどうアピールしていくかが課題となる。

質の高い卒業生を多く輩出し、社会に活躍のできる場を広く作っていくことも課題となっている。

情報デザイン学科

①教育目標

20世紀後半、科学技術の課題として生まれた「情報」概念は、その発展と社会化とともに、今、文化芸術の主要テーマとなっている。本学科はその「情報」を美術表現の対象とし、そこに新たなファインアートとデザインの領域を拓いている。

コンピュータに代表されるデジタルテクノロジーや国際的な情報通信ネットワークが実現している機能は、大きな可能性とともにさまざまな問題を私たちの社会生活に投げかけている。直接に触れることができず、それ自体が見える形をもたない情報。その情報と人間社会との豊かな関係をつくり出すこと、それが本学科の教育目標である。

これまで本学が培ってきた美術表現教育を基盤として、科学や工学あるいは数学や哲学が美術と連携する領域を切り拓き、そこで活躍する新しいタイプのクリエイター養成に取り組んでいる。

②カリキュラム構成

本学科の教育カリキュラムの特徴は、作品制作を「行うこと」（演習科目）とそこに不可欠となる幅広い知識を「知ること」（専門講義科目）の連携である。ここでは、理系、文系、美術系、音楽系といった既存の枠組を超えたダイナミックなカリキュラムが提供される。制作する学生たちは、さまざまな知識に支えられて「自分が何を如何に制作しているのか」を言葉と知識で説明する力を獲得する。

ここで学ぶことのできる表現の幅は、言語表現から平面表現、立体表現、映像表現、音響表現、環境表現まで広がっている。またその社会応用へ向けて、カリキュラムの総合性と専門性を両立させるため、「情報芸術」と「情報デザイン」の2つのコースプログラムを用意している。それぞれのコースで少人数のクラスを編成し、学習領域の関連性を高め、専門性の強化と表現の深化をはかっている。同時に両コースは、共通の講義科目や共同プロジェクトをとおして連携し、総合的な視点と社会の変革に対する柔軟な対応を欠かさないための教育研究システムが組み込まれている。

年次	第2期(2002-2004年度)	単位	第1期(1998-2001年度)	単位
1年次 (必修科目)	情報デザイン学概論	2	情報デザイン学概論	2
	情報デザイン学概論	2	メディア環境論	2
	情報デザイン演習	8	基礎造形演習	4
			情報構成演習	2
			リスニング英語	2
	情報デザイン演習	8	基礎造形演習	4
2年次 (必修科目)	情報デザイン演習	8	情報デザイン基礎演習	4
			プログラミング演習	2
			日本語表現法	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン基礎演習	4

IV. 教育研究

			プログラミング演習	2
			プレゼンテーション英語	2
	テクノロジーアート史	2	情報機械史	2
3年次 (必修科目)	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
			情報数学	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
			情報数学	2
4年次 (必修科目)	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
			情報デザイン学特論	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
	卒業研究制作	10	卒業研究制作	8
2～4年次 (選択科目)	情報システム論	2	ハードウェア構成	2
	デジタル表現論	2	ソフトウェア・アーキテクチャー	2
	インターネット概論	2	マルチメディア基礎論	2
	アルゴリズムデザイン	2	オブジェクト指向方法論	2
	ヒューマンインタフェース	2	ヒューマンインタフェース	2
	デザイン方法論	2	分散環境デザイン論	2
	サウンドアート	2	知識モデル	2
	デザインパターン	2	デザインパターン	2
	映像論 (2003年度より映像デザイン論)	2	映像史	2
	音響・音楽論	2	音響・音楽論	2
	メディア教育システム論	2	コミュニケーション論	2
	現象学とデザイン	2	現象学とデザイン	2
	メディア芸術論	2	メディア芸術論	2
	情報社会	2	知的財産権	2
	デザイン史 (2003年度より情報デザイン史)	2	デザイン史	2
	認知科学	2	認知科学	2
	情報と職業	2	情報教育	2
	デザイン・サーベイ	2	組織と社会	2
	パフォーミング・アート概論	2	生物学と情報	2
	インターフェース概論	2	科学史	2
	ベンチャー起業論	2	ベンチャー起業論	2
	メディア芸術論	2	空間認識論	2
	写真論 (2003年度より写真デザイン論)	2	構造人類学	2

第1期から第2期への科目変遷(表 -9)

選択科目に関しては、、、のそれぞれから8単位以上、計32単位以上履修する。

③教育設備

本学科の教育は、さまざまなデジタル情報設備機器によって支えられている。各室に設

IV. 教育研究

置され教育用に稼動しているパソコンが全体で 200 台以上、プリンター、プロジェクター、そして貸出用機材としてのデジタルビデオカメラ (DV カメラ) 69 台など大量のハードウェアを不可欠とする教育が行われている。また、パソコンには多種大量のソフトウェアが装備され、全てのハードウェアとともにすみやかに稼動するため、常に維持管理運営し一定期間で新機種に入れ換えを行っている。

それら業務を遂行にあたる担当教員とスタジオ付き助手・副手は責任が重く、本来の教育業務に加え、日進月歩する技術を習得しながらの教育環境の整備という過重な負荷のかかる仕事となっていることも否めない。今後このような「設備産業型」の教育組織管理を大学全体で真剣に検討することが火急の課題であると考えられる。その第一歩として本学科では 2001 年度より、学科ネットワーク構築と各種サーバ等の維持管理運営に関して、それを担当する技術員を配し、専任教職員の負荷を軽減した。

部屋名称	設 備 名 称				
	パソコン	プリンタ	サーバ	プロジェクター	貸出用DVカメラ
学科事務室 (研究室 206)	10	1	0	0	0
アゴラ 207	0	0	0	1	0
会議室 208	0	1	5	1	0
プレゼン室 213	0	0	0	1	0
プレゼン室 203	0	0	0	1	0
3 階、旧スタジオ 7	17	0	1	1	0
3 階、旧スタジオ 7 教員室	5	1	0	0	0
スタジオ 2	20	0	0	4	0
スタジオ 2 教員室	4	3	0	0	0
スタジオ 5	23	0	0	2	0
スタジオ 5 教員室	7	2	1	7	5
スタジオ 6	27	3	0	0	29
スタジオ 6 教員室	0	1	1	2	11
大学院生室、情報芸術系	4	1	0	0	0
武道館	0	0	0	0	0
スタジオ 1	50	2	0	2	7
スタジオ 1 教員室	15	2	5	2	0
スタジオ 3	23	5	0	0	0
スタジオ 3 教員室	4	1	0	2	10
大学院生室、情報デザイン系	3	0	0	0	0
スタジオ 4	21	2	0	1	3
スタジオ 4 教員室	5	3	2	1	4
合計	238	28	15	28	69

ハードウェア機器の概数 (表 -10)

2004 年 8 月調べ

④専任教員と非常勤教員の役割

本学科の人的組織構成は、専任教員 12 名、助手・副手 8 名でスタートし、2001 年度 7 月より、専任教員数は変えず、助手・副手 7 名、学科事務員 2 名の体制である。非常勤講師数は 2002 年度より安定し 23 名を維持、その他、臨時講師を配置している。

非常勤教員の役割は、教育カリキュラムに必要な幅広い技能と知識を提供すること、また教育内容をその時代の社会技術状況に対応させることにある。そのために適切な人選を行い、教育の質と量を保証している。専任教員は、情報芸術領域と情報デザイン領域の教育研究について中長期展望を定め、教育研究組織の構成と中核となる教育と研究の運営に責任をもってその業務にあたっている。

年度	役 職									
	専 任				客員教授	専 任			技術員	非常勤講師
	教員全員	教授	助教授	講師		助手	副手	学科事務		
2002 年度	12	3	6	3	2	4	3	2	2	23
2003 年度	12	6	4	2	3	3	4	2	2	23

教職員の構成と人数(表 -11)

⑤学科運営の意思疎通

大学、学部、大学院、学科などさまざまなレベルでの組織が活動するために、意思疎通をはかっている。本学科では 2 つのコース編成をすみやかに運営するために、学科長、教務主任の他、コース代表 2 名をたて、「学科会議（コース連絡会議）」と「コース会議」を併設運営している。その他、コース共通として学科事務員を加えた助手・副手連絡会議をはじめ、コンピュータ関連費による機器、技術員アウトソーシングなどの検討会議を運営している。

大学院カリキュラムの新編成にともない「情報デザイン領域」の大学院教育プログラムは 2002 年度より始まり、本領域を志望する約 20 名の大学院生指導を行っている。しかしその教育内容の充実に十分な時間をかけられない現状にある。1 クラスの履修が少数となる大学院教育を担当することもまた、ひとつの教育業務であることが適切に評価管理されることが必要である。その点は、本学全体の高等教育プログラムの確立のために早急に改善すべき重要課題だと考えている。

⑥学生の入学

本学科は設立時より、美術系大学志望だけでなく、幅広い領域を学ぼうとする学生に学習の機会を提供するために、2 種類の入り口を設けている。一つは、描画表現力を評価する入学試験、他は一般の学科目の力を評価する入学試験である。前者が一般入試「本学一般方式」を利用。後者は 2000 年度より大学センター試験を利用する「センター利用方式」である。「センター利用方式」は一般入試の「デザイン」科目の受験を含んでいる。それぞれは 8 割、2 割の定員配分である。両者の併願が可能のため、2001 年度よりセンター利用方式の志願倍率が増加していることがわかる（表 I-12 参照）。

大学センター試験利用では、「地理歴史、公民、数学、理科」の 4 教科 25 科目から選択

IV. 教育研究

する1教科1科目が得点となる。「外国語」科目には2002年度よりアジア圏の言語を加え「英、独、仏、中、韓」から1科目選択となっている（表I-13）。

センター利用では、「公民」、「数学」、「理科」を選択した者が入学している。それら科目の得意な学生が、「鉛筆デッサン」科目で入学した学生達と共同し、多様で豊かな学びをつくっていることもこの学科の特徴となっている（表I-14参照）。

2005年度入試より、受験生の普遍的な描写力と表現力を重視するため、これまでの入試科目の「デザイン」（100点）を「視覚表現」（200点）に改め、持参用具に「水彩用具一式（透明・不透明絵具共に可）」を加える予定である。広く、ファインアート系学科志願者の応募が期待されている。

入学年度	入試方法	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
2000年度	一般方式	80	821	801	176	84	4.6	10.3
	センター利用方式	40	378	360	82	47	4.4	9.5
2001年度	一般方式	80	831	798	176	86	4.5	10.4
	センター利用方式	40	487	442	86	44	5.1	12.2
2002年度	一般方式	80	747	726	178	88	4.1	9.3
	センター利用方式	40	316	233	99	44	2.4	7.9
2003年度	一般方式	80	721	697	173	87	4.0	9.0
	センター利用方式	40	439	390	112	42	3.5	11.0
2004年度	一般方式	80	617	596	198	83	3.0	7.7
	センター利用方式	40	371	338	100	44	3.4	9.3

受験者数変遷（表 -12）

入学年度	入試方式	本学試験科目		大学入試センター試験科目
2000年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	
	センター利用A方式	デザイン		外国語、国語、数学
	センター利用B方式	デザイン、論文		外国語（英、独、仏1科目選択） 国語（国、国・国から選択） 数学（数学、数学・数学Aから1科目選択）
2001年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	
	センター利用A方式	デザイン		外国語、国語、数学
	センター利用B方式	デザイン、論文		外国語（英、独、仏1科目選択） 国語（国、国・国から選択） 数学（数学、数学・数学Aから1科目選択）
2002年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	
	センター利用方式	デザイン		外国語（英、独、仏、中、韓） 国語（国、国・国から選択） 地理歴史、公民、数学（4教科から1教科1科目選択）
2003年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	

	センター利用方式	デザイン		外国語（英、独、仏、中、韓） 国語（国、国・国から選択） 地理歴史、公民、数学（4教科から1教科1科目選択）
2004年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デザイン	外国語、国語	
	センター利用方式	デザイン		外国語（英、独、仏、中、韓） 国語（国、国・国から選択） 地理歴史、公民、数学（4教科から1教科1科目選択）

入試科目の変遷（表 -13）

年 度	選 択 科 目				
	公民	数学	地理歴史	理科	合計
2002年度	17	11	7	9	44
2003年度	15	5	7	15	42
2004年度	15	12	9	8	44

センター利用入学者の選択科目別人数（表 -14）

⑦教育効果

本学科の教育の成果は、既存の領域の枠に収まらない新しい時代のクリエイターやイノベーターを社会に広く輩出し、新たな作品や産物を生み出すことである。2001～2003年度、3期の卒業生たちは、文化庁のメディア芸術祭やNHKのデジタルスタジアムにより、次世代のアートとして広く社会に認知されるようになったメディアアートの分野や、ユーザ・インタフェースや情報デザイン専門家が不可欠となった製造業のデザイン部門、あるいは広告、マスコミ、印刷業等さまざまな領域で活躍を始めている。

現在明らかになりつつある、国内外展覧会における情報（メディア）芸術表現領域の確立、産業社会における専門部門の確立、あるいはWebなど社会的な情報活動応用での成功を追い風に、本学科が提供した教育の効果が社会に顕在化しつつあるのが現状と言える。

IV. 教育研究

氏名	受賞年度	展覧会	受賞名	作品名	卒業年度
力石咲		第7回文化庁メディア芸術祭 アート部門インスタレーション	審査員推薦 作品	ManGlobe	学03卒
		第9回学生CGコンテスト イン タラクティブ部門(福岡アジア美 術館)	最優秀賞		
		第7回文化庁メディア芸術祭 福岡展	展示		
		インフォメーションアートの想 像力展(都立写真美術館)	展示		
工藤幸平	2003年度	作品ヤングパースペクティブ 2003	入賞	鬼切	学03卒
	2002年度	松本リズム万博2002、イメージ フォーラム	発表		
		第1回タマアートコンペティシ ョン	グランプリ	国歌/キミガヨ	
		インフォメーションアートの想 像力展(都立写真美術館)	展示		
		第2回上野毛展	グランプリ	happoufusagarizm	
木村匡孝		第9回学生CGコンテスト イン タラクティブ部門	最終選考ノ ミネート作 品	フッタウェイ1号	学03卒
		インフォメーションアートの想 像力展(都立写真美術館)	展示		
		第18回ハンズ大賞	審査委員特 別賞三井康 巨賞	peace walker.0T-1	
		第18回ハンズ大賞展 Bunkamura ザ・ミュージアム、大阪 IMPホ ール(大阪ビジネスパーク内)			
蒔貴彦		芸術科学会 DIVA 展	特別奨励表 彰	ピニルハウス	学03卒
		福岡アルティアム	展示	巣くう	
井上恵介	2003年度	メビウスの卵展 2003 多摩展	公演	SPACE MAESTRO	現院1
		未来の学校グランドフィナーレ 大阪彩都	公演		
石黒俊輔		映像表現フォーラム(画像電子学 会主催)	最優秀賞	running	学03卒

IV. 教育研究

村上陽子	2001 年度	NHK デジタルスタジアム	放送（最優秀 作品選出）	VisiblePlace	学 00 卒
富岡優子	2002 年度	NHK デジタルスタジアム	放送	VagueVision	学 00 卒
菊地春佳		世界最大のソフトウェア・アートのポータルサイト「runme.org」	展示	NETARIUM	学 01 卒
	2003 年度	NHK デジタルスタジアム	放送		
乙津理恵子		第 5 回 SICF(Spiral Independent Creators Festival) 展	準グランプリ	デジタル音響詩吟	学 02 卒
		「Electric Rainbow Coalition」フェスティバル(米米ダートマス大学にて開催)	参加		
大畑さやか		NTTICC「ネクスト～メディア・アートの新世代」展	展示	internal sense	現 4 年
久保奈緒		中小企業ホームページグランプリ(たましん主催)	企業賞		現 2 年
松尾明子		Photo slide show of students vol.3	準グランプリ	帰郷	現 4 年
小山内久美子		文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門	奨励賞	星の子	現 4 年
鈴木喜丈	2003 年度	青山芸術祭デザインアワード 2003	準グランプリ	日の丸	現 4 年
石黒俊介		映像表現フォーラム(画像電子学会主催)	最優秀賞	running	学 03 卒

学生・卒業生の受賞歴等(表 -15)

特に情報芸術コースの創作の特徴は平面や立体、映像や音響、時間や空間、物質や非物質といった形式を問わないことにある。下記のような多様な特別講義とも連動したオープンなスタンスが原動力となって、本学科はこれまで独自の文化を育ててきたデザインとファインアート、美術と音楽、アカデミーとストリートなどの領域をつなぎ、それらを再構築していく 21 世紀の美術大学のひとつのあり方を提示している。

年度	氏 名	所 属
2002 年度	カリーハンス・コモネン	ヘルシンキ芸術デザイン大学
	高畑 勲	アニメーション作家、本学科客員教授
	カール・ストーン	コンピュータ音楽家
	大重純一郎	映画監督
	JODI	ネットアーティスト
	川本喜八郎	アニメーション作家、本学科客員教授
	田中泉	デザイナー
	小阪淳	デザイナー

2003 年度	ウィリアム・ダックワース	コンピュータ音楽家
	高畑勲	アニメーション作家、本学科客員教授
	久保田達也	起業家
	クリストフ・シャルル	コンピュータ音楽家
	エキソニモ	メディアアーティスト
	有吉司	インタラクティブ・デザイナー
	針谷周作	メディア・ディレクター/プロデューサー
	クワクポリョウタ	デバイス・アーティスト
	加藤道哉	CG 作家
	佐藤真	映画監督

特別講義の実施状況(表 -16)

⑧ 就職支援

本学科卒業生が社会に出る状況を俯瞰するにあたっては、いわゆる企業就職だけでなく、会社やNPOなどの起業活動、作家活動、アートスタジオや小プロダクションでの修行やコンテスト受賞を含め、緩やかで幅広いそして長期的な視点でそれを捉えることが重要である。

本学科が行っている学生就職等支援の業務は、就職、企業実習（メーカー系企業が1週間程度の期間で実施）、インターンシップ、社会での作品制作活動紹介など多岐にわたっている。企業系の就職においては2003年度よりインターンシップ実施企業が増加し、それにともない参加学生数も増加している。2004年度には海外企業（ドイツ、シーメンス社）のインターンシップへの参加が実現した。就職担当業務は、2003年度まで教員2名体制で行って来たが、本年度より、代表教員1名、補佐教員を2名、副手を2名配置し支援の充実をはかっている。

本学科卒業生の就職については、卒業時の学生報告資料をもとに、報告者の中の就職希望者数を基数とした場合に推計される就職率はおおよそ60%台と言える。企業就職をみた時の最近の傾向は、就職試験での「SPI 試験」などいわゆる一般学科知識の不足による不合格報告事例が多く、企業就職を希望する学生への対応検討が必要になっている。また、大学院修了者への就職支援もさらなる充実が必要となっている。

卒業年度	企業、事務所など	教育機関	進学	小計	卒業生人数
2001 年度	35	2	6	43	99
2002 年度	42	1	4	47	106
2003 年度	32	1	9	42	125

就職の状況(表 -17)

分類	業種	就職先機関名
企業	メーカー	ソニー、東芝、日立製作所、セイコエフソン、リコー、オリンパス、パナソニック、島津製作所、ヤマハ、デンソー、ジャストシステム、セガ、ナムコなど
	広告、マスコミ、印刷	電通、博報堂インフォグラフィクス、リクルートメディアコミュニケーションズ、毎日新聞社、テレビ朝日、凸版印刷など
事務所		イート、ソフトハウス、カイザイン、ノールズなど

学部卒業者の就職先(表 -18)

修了年度	修了者人数	就職先機関名及び業種名
2002年度	5	(独)産業技術総合研究所、企業、アーティスト、大学研究室
2003年度	7	企業、映像プロダクション、写真スタジオ、大学院博士課程進学、留学

大学院修了者の就職先(表 -19)

⑨ 研究活動

本学科の研究活動は、科学研究費補助金(文部科学省・日本学術振興会)、科学技術振興事業団研究プロジェクト助成をはじめ、産業界、地域社会、行政との連携などさまざまななかたちで幅広く行われている。表 I-18 は、産学共同研究として本学附属メディアセンターに登録実施した研究プロジェクトである。

それら研究プロジェクトの内容は、卒業研究制作発表会や展覧会などの機会に、積極的に開示交流することが行われている。しかし、その内容の十分な学科内での交換がなされていないとは言えない現状である。関連する研究のフォーラム等を行うことによって、学科内、あるいは大学内の交流を計ることの検討が必要と考える。

実施年度	研究名	担当教員	相手先
2002年度	情報デザインの設計手法による情報共有交換機構の通閉システムの研究	須永剛司	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所
	人とロボット間のインタラクション・デザイン(2)	吉橋昭夫・須永剛司・楠房子	日本電気(株)マルチメディア研究所
	東芝科学館 WEB サイトコンテンツ開発	原田泰・永井由美子・加藤道哉・北島督	(株)東芝デザインセンター
	InfoLead を用いた情報検索の研究	原田泰	日本電信電話(株) 情報流通プラットフォーム研究所
	大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究	吉橋昭夫	京王電鉄(株)
2003年度	映像音響インタラクション制作	三橋純・春日聡・(ヲノサトル)	アトビシステムズ(株)
	デジタルカメラの操作性向上に関する研究	須永剛司	オリンパス光学工業(株) 映像システムカンパニー
	インタラクションデザイン手法および関係性指向コミュニケーションメディアの研究	須永剛司	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所

IV. 教育研究

インタラクティブデザインの研究	須永剛司	(株)日立製作所基礎研究所
情報デザインから見た次世代金融営業店の情報空間（の設計）に関する研究	須永剛司	沖電気工業(株)
子供向けビジュアル言語の研究	楠房子	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所
Mqbic システムによるデジタルマンガプレイヤー開発とまんがのウェブサイトにに関する研究	原田泰	(株)毎日新聞社総合メディア事務局 毎日インキュベーションセンター
甲南大学ビジュアルデザインに関する研究	原田泰	(株)毎日新聞社総合メディア事務局 毎日インキュベーションセンター
人とホットの間のインタラクティブデザイン(3)	吉橋昭夫	日本電気(株)マルチメディア研究所
大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究(2)	吉橋昭夫	京王電鉄(株)
現金自動取引装置(ATM)における伝達メディアとしての効果的表示方法に関する研究	吉橋昭夫	沖電気工業(株)
技術情報公開のためのコンテンツ開発に関する研究	原田泰	(株)NEC

産学共同研究一覧(表 -20)

科研費は含まず、研究活動の一部

芸術学科

①教育目標

芸術の媒介者（学芸員、プロデューサー、編集者など）や享受者の創造性を育てるということを目指して来た。しかし、媒介者という言葉がいささか抽象的であり、学内外へのアピールという点で、問題があったように思われる。そのことを踏まえて、本学科の理念を2005年度に向けてより具体的にわかりやすく改訂した。芸術の4つの楽しみ、創造、鑑賞、研究、企画のそれぞれの楽しみの連鎖を自分のものとし、その楽しみの連鎖を多くの人々に手渡していける人材を育成すること、それが本学科の新しい教育目標である。

②カリキュラム構成

[実態]

1, 2年次では、表現研究、現代美術史（日本・東洋・西洋）、芸術学原論、言語表現研究、コンピュータ概論などの、基礎となる科目を必修および選択必修として来た。

3, 4年次では、芸術学研究、文化演出研究、映像メディア研究などのコースに分かれた、比較的少人数のクラス編成によるゼミを設けて来た。また、1年次には「創造の現場」と称する、学内実技系による素材・技法等の基礎的な問題を論じる科目を設けて来た。2年次には「プロデュースの現在」と称する、本学科出身の多ジャンルにわたる専門家達によるプロデュースの実際を論じる科目を設けて来た。さらに、語学重視の方針を採り、第一外国語、第二外国語を必修として来た。4年次には、全員に

演習の担当者を指導教員とする、卒業論文（24,000字以上）を課して来た。

[現状の評価]

従来のカリキュラムの問題点を調査するアンケートを実施したところ以下の結果が得られた。まず第一に、1, 2年次での英語・コンピュータ教育について教育効果が芳しくないとするアンケート結果がでた。英語に関しては、語学のレベルやクラス・教員が自由に選べないので学習意欲が低下している。1, 2年次で必修に指定しているコンピュータ概論に関しては、ソフトの使い方を学習する程度にとどまり、卒業論文に集約されていく学習の全体の中でコンピュータ教育が位置づけられていないきらいがある。また3, 4年次のコース（ゼミ）に関しては、学生の関心が多極化し、特定の教員・コースに縛られない形での自由で多様な研究を願う学生が増えて来ていることも分かった。

[対処法]

新しい教育目標を達成するために従来のカリキュラムを新しいものに組み直す必要がある。英語に関しては、レベルとクラス・教員を選択できるシステムが望ましい。第二外国語に関しては中国語・韓国語の選択肢もあってほしい。さらに本学科独自で講読の授業を充実させたいと考えている。

コンピュータ教育は一貫した教育システムを導入する。1, 2年次のコンピュータ概論では、情報や資料へのアクセス手段として、またコミュニケーションのツールとして、インターネット上の各種サイトをどのように活用していくのかを教える。例えば「関心空間」のサイトを使いながら学生の関心を方向付けていくなど。また3, 4年次では収集した情報・資料を分析・再構成し、各種データベースを構築したり、インターネット上にウェブサイトとして公表していく技術を広く教えるコース（ゼミ）を設ける。大学院では情報・資料の収集・分析のみならず研究成果のプレゼンテーションや大学院生論文集の編集・出版のためのコンピュータ技術をも習得するゼミを設けたい。こうした英語力・コンピュータ・リテラシーの強化は、研究や企画の能力を側面的に向上させることが期待される。

新しい教育目標である「創造、鑑賞、研究、企画の楽しみの連鎖」を効果的に習得するカリキュラムについては、現在その概要を立案している。「創造の楽しみ」に関しては、従来の、表現研究、造形研究、言語表現研究、映像研究に加えて、1, 2年次で実技の基本を学ぶ実技講座を、集中講義・補講期間に実施したい。美術大学にある芸術学科として創造の現場に居合わせている特権を授業にも反映し、創造の楽しみを自ら知ることが、芸術全体の理解にとっても重要であることを強調したい。

「研究や企画の楽しみ」に関しては、3, 4年次のコース（ゼミ）で、来年度より本学科の全教員が実践系科目と理論系科目を平行して行うこととする。実践系科目は通年で4単位、3, 4年次で1コマずつ必修、理論系科目は半期で2単位、各教員は1年次で2科目行い、学生は3, 4年次で2コマずつ必修とする。卒論の指導教員はゼミの教員とは関係なく自由に選択できる。それにより、3, 4年次は最大で7人の教員に指導を受けることができ、近年の学生の関心の多様化に対応できる。また多様な理

論や実践の領域に触れることで、「研究や企画の楽しみ」に幅が出て、研究と企画の連携による成果も期待される。

「鑑賞の楽しみ」に関しては、従来のオフ・キャンパス（3年次対象）をさらに充実させて、1，2年次にも鑑賞体験の機会を増やしていきたい。

③教育効果

教育の効果については、全学で実施している授業評価を参考にして各教員は、毎年授業のあり方に改善を加えている。またカリキュラム構成の項で既に触れたように、2004年度4月より語学・コンピュータ関連授業に関してはアンケート調査を行い、その結果を考慮して来年度より新しい授業で臨みたい。

今後も頻繁にアンケート調査を行い、継続的に教育効果のあるカリキュラムを組みなおしていきたい。

④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員と非常勤教員の間には密接な交流、意見の交換が望ましいが、これまではこうした交流はそれほど活発ではなかったように見受けられる。また財政的に専任教員の数が限定されている現状では、非常勤教員にもこれまで以上に大きな役割を果たしてもらう必要が出てくるだろう。

昨年は非常勤講師との意見交流会（カリキュラム会議）を行い、カリキュラムの諸問題について検討した。2005年度以降の教育・研究に活用したい。

⑤学科運営の意思疎通

本学科では数年前より、教員・助手の間でメーリング・リストを活用して意見の交換を活発に行っている。

⑥研究活動

2000年度：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）

2001年度：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）

2002年度：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）、秋山邦晴氏資料による現代の音楽と美術の関係（海老塚）、鑑賞教育におけるツールの必要性（海老塚）

2003年：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）秋山邦晴氏資料による現代の音楽と美術の関係（海老塚）、鑑賞教育におけるツールの必要性（海老塚）

本学科は1998年に現代美術資料室を創設し、本学科の教員が所蔵する貴重資料の委託を受けて、現代美術にかかわる特殊資料の収集・整理、デジタル・データベースの形成、インターネット上のウェブサイトへのデータベース公開を他大学に先駆けて行って来た。2000年4月には本学図書館所蔵の瀧口・北園文庫のウェブサイトを構築・公開し世間の注目するところとなった。平出・村山の共同研究は現代美術資料室や学外の有識者の参加するプロジェクトであり、研究発表に加えて資料展・シンポジウムも上野毛図書館文庫資料室で行うなど、瀧口・北園研究に画期的な役割を果たしたといえる。2002年度には海老塚によ

る秋山資料研究が加わり、音楽関係の資料を扱う事になり、資料室は現代芸術資料センターへと改めた。海老塚はまたセゾンアートプログラムと共同で、鑑賞教育のためのツールボックスセットとテキストを開発し、小学校や美術館における鑑賞教育の実践活動を進めて来たが、本学単独でも、**2002**年度に松本市美術館、神奈川県民ホールギャラリー、**2003**年度には八王子市教育委員会、島根県教育委員会セミナーで実践講座を行い好評を博している。以上の成果は、通常の教育・研究とも密接に連動している。

デジタル・アーカイブの設計・構築と芸術普及は **21** 世紀の社会において、最も注目になる未開発の領域であり、様々な新しい試みがなされようとしている。本学科ではこうした共同研究を通して、未来社会に必要とされているアーカイブ設計と芸術普及のスキルを実践と理論の双方の観点から探求していく予定である。

⑦ 就職支援

本学科では **2000** 年度からプロデュースの分野で活躍する卒業生を本学に招き、仕事内容や現場のアクチュアルな問題点について講義をしてもらう連鎖講座を設けて来た。また、個々の教育のネットワークを活用することが、学生の就職機会の増大につながっている。

⑧ 課題

当面の課題については現在進行中のカリキュラム改革に既にその回答が実験的に織り込まれているので、ここでは詳述を控えたい。各項目ごとにその分野での課題は指摘しておいた。

⑨ 大学院

A) 教育目的

大学院博士前期課程（修士課程）に関しては、美術館学芸員等のより高度の専門化養成を目指して来た。

理念としての大枠は、現状で良いと思われる。他大学からの入学者が多い点は好ましいが、学内からの進学者をさらに多くする必要がある。今年度の学部での改革を終えた後、**2005** 年度において、大学院の教育体制の、大幅な充実を検討する予定である。

B) カリキュラム構成

学部の本学科教員と、共通教育の美術史系教員によるカリキュラムを組んでいる。大枠としては、芸術学系、美術史系、文化演出論系からなり、修士論文指導教員を学生の学問分野に応じて、選定している。それなりにバランスの取れた構成ではあるが、専攻としての求心力がやや欠けているように思われる。**2005** 年度において改革を検討する。

C) 教育効果

修士論文等においては、一定のレベルの成果を収めており、また、修士課程在学学生による研究誌も充実している。学芸員等の採用実績や、評論の分野で活躍している人材もあり、それなりの成果を上げている。**2005** 年度において改革を検討する。

⑩専任教員と非常勤教員の役割

原書講読の一層の充実が望まれるなど問題点があり、2005年度において改革を検討する。

⑪学科運営の意思疎通

随時教員会議を開催しているが、共通教育美術史系教員とのより円滑な意思疎通が必要である。2005年度において改革を検討する。

⑫就職支援

美術館への就職などの紹介を積極的に行っているが、より一層の就職の増大をはかりたい。

⑬課題

先に記したように、不十分な事項については、2005年度において大幅な改革を検討する予定である。

共通教育

①学部の共通教育

本学において共通教育の役割は、大学教育4年間の中で基本学理を補強するという意味において極めて重要である。年々、知識が細分化され、全体を見通す能力が弱体化する現状を、未来社会をさらに健全に機能させるために総合的観点から、美術史、宗教学、物理学、材料学、文学、心理学、メディア論、デザイン論、外国語、考古学、文様史、文化史、その他、多種多様な科目を設置して、学生に総合的判断のできる能力を与えようという使命を、共通教育には与えられているものと認識するが、そのために毎年、カリキュラムの見直しをはかり、大学の要求、学生の要求を鑑みながら、授業を充実させている。2002～2003年度にかけては、廃止科目、統合科目、新設置科目の調整をはかったが、これらはまだ続行中の作業でもある。今後期待される。

A) 人文科学と社会科学

人々の心に訴えるすばらしい美術やデザインを制作する上で、豊かな人間性と幅広い教養は不可欠である。そうした、人間性と教養を培うのが、人文科学系の学問であり、共通教育では、哲学や現代哲学、倫理学、心理学、造形心理学、歴史学、日本文化史論、文学、美学、考古学、音楽など、数多くの人文系学科目を開講し、ゼミ（哲学・歴史・文学）では、教員と学生との直接的な交流の中で、より深い知識と幅広い視野を得られるよう、努めている。

また、デザインはもとより、現代の美術も、広い意味での社会との深い関わりを度外視しては、存在し得ない。共通教育では、学生がそうした社会的環境に幅広く、そして鋭い目を向け、考えていくことができるよう、社会学、法学、経済学、社会思想史を始めとする社会科学系の基礎的学科目を開講し、マスコミ心理学やマーケティング

理論、情報論など、時代の要求に即した科目も、必要に応じて開講している。

B) 自然科学系科目と工学系科目（コンピュータ関連科目は除く）

本学には生物学、物理学、芸術と科学（自然科学）、数学、人間工学、画像工学等の科目があり、天文学関係は他大学教員の2回の特別講義を行っている。

環境問題と生物学、環境問題と自然科学（水と食、ホルモン）、環境問題と物理学（エネルギー物理学、温暖化防止）等に取り組んでいる。

画像工学に関してはホログラフィ実験、バーチャルリアリティを実施している。

C) 芸術材料学

美術大学における作品制作は当然のことながら、非常に重要な作業であると考えられるが、それらの作品の多くは、現在も実際に存在する物質によって制作されている。

「芸術材料学」は、物質の性質を理解し、制作に役立てることを狙いとしているが、それは、自然科学的な知識や思考を獲得することであり、具体的には物理学、化学、動植物学、地学、銅物学等々の広範な世界にわたっている。

この広範な世界をより理解し易くする方法として、研究室で蒐集した様々の材料サンプルの提示を行ない、それに関係する道具の取扱いなどを実際に示しているが、その他にも視覚的な情報の多様—図版や実写を含めたスライド、ビデオやDVDによる素材や技術・技法の紹介などを行なって来た。このほかに、例えばPCによる分子レベルでの化学反応のシュミレーションやアニメーション表現による物質の変化の様態の紹介などを行っており、一定の成果を得たものとするが、PCによる画像の制作などにはかなりの時間を要し、継続的に行なうには困難を感じている。また、実物サンプルについても、例えば顔料の原鉱石など主要なものが欠けており、今後の購入を考えている。また、将来的には実技教室との共同により、より具体的かつ現実的な材料へのアプローチを行ないたいとも考えている。

D) メディア領域

授業の内容に関して、様々に工夫している。「デザイン史」などは、歴史的な内容を主とした講義であっても、歴史上の出来事・状況と、今日のそれらを必ず関連づけ、意味性を鮮明に立ち上げている。その結果を含め、授業そのものが形骸化しないようにつとめている。ビジュアル教材に関して、通り一遍のものではなく、つねに複数準備し、編集などを行ない、授業の中で使いやすいように工夫している。講義のテーマ、内容は、かなり高度なものを目指している。

E) 語学

まず美術学部全学生に対して、外国語学習に関するアンケートを実施した。従来設置してきた外国語科目は英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語および留学生対象の日本語であったが、他に学生が興味を持っている言語、学びたいと思っている言語はあるのか、ということ調査することが狙いであった。その結果、アジアの言語に興味を持つ学生も多数いることがわかった。そこで、2002年度から試験的に中国語を1

コマ自由科目として開講した。2002年度、2003年度ともに100名を超える学生が登録して順調な経過が見られたので、2004年度からは中級クラスをもうけることを決定した。また、中国語に続き、韓国語も開講するという展望を持った。このようにして、欧米中心主義を改善し、学生に幅広い外国語学習の機会を与えるという方向に向かいつつある。また、ネイティブスピーカーのクラスや上級クラスをもうけた成果として、学生の間で外国語学習に対する熱意が向上し、留学を目指したり、実際に留学する学生が少しずつではあるが増えて来たのも良い兆候といえる。今後もよりきめ細かい、多様なクラス編成と教育内容の充実を目指している。

F) 東洋美術史

大学に入りたての学生に、それまでほとんど馴染みの無かった東洋美術史を教えるのは、大変困難を伴うものである。授業内容を練りに練り、授業方法も毎年改善し、試行錯誤の日々であるが、美術大学での東洋美術史講義において求められるものは、という問いには、未だはつきり答えられない。むしろこちらが学生諸君に問いかけ、その答えをバックアップして授業を組み立てているという現状である。いずれにせよ、何をどの程度まで習熟させるかという年間の授業の目標値を旨く設定することが肝要であろう。

G) 西洋美術史

造形表現の基本をさまざまな角度から考察する美術史は美術大学における重要な教科であることには疑問の余地がない。本学にはそれを時間的な流れに沿って講義する美術史概論、さらに個別の問題に対する理解を深める研究が設置されており、その完成として美術史ゼミが設けられている。西洋美術史に関しては、2000年度までややもすると近・現代に偏りがちであった対象領域を、2001年度から図像学や主題論など、ずっと広い観点に立って講義する方向へと修正を行い、学生の視野を広げることに役立てている。今後は語学系教科と連携しながら、原書を読みつつ問題意識を深めることの出来る学生の育成に努めたい。

H) 教職課程

教職課程は、本学学則第一章総則「第一条 本学は、広く造形芸術全般について高度な学理技能を教授研究し、あわせて国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育者研究者等を養成することを目的とする。」の大学使命の一翼を担う課程である。

1998年の教育職員免許法の改正により、義務教育免許状を取得する希望者は教育実習期間の延長（2週間→3又は4週間）や教職関係科目の履修科目の増加がもたらされた。新学習指導要領改訂に伴い、美術授業の削減により従来は中学校1年生で週2時間あった授業が1時間に削減された。美術の基礎・基本はもとより、芸術教科としての本領を発揮するには誠に厳しい教育現場の状況となっている。

このような美術教育を取り巻く現況において、教職関係のみならず教職関連領域の一般教養及び専門教養との連携をはかる必要がある。具体的には、美術教育実習充実、

少人数制による実習及び講義への取り組み、教育実習の研究授業訪問指導を全学で取り組む教育実習検討委員会の創設などである。この2年間で実技教員による研究授業への参加の方向性が生み出されて来ている。

教職課程は、毎年100～120名の取得者を輩出している。それとともに、学部卒業、大学院終了後そして企業等の経験者が科目等履修生及び教員採用の相談に来校する。本学を卒業後においても、進路、就職相談の受け皿としての一助に努めたい。

I) 学芸員課程

近年、美術館・博物館の変貌振りは著しく、組織の大変革がなされ、ひいては財政基盤まで含み大きく揺れ動いている。不動であるべき公立博物館が存亡の危機に陥ったり、入館者数の増加のみを狙う企画展が優先されたり、文化財の保護とそれに伴う修復や研究等はそっちのけという現状も見られる。危機的状況の始まりである。しかし、大学に設置された学芸員課程は、博物館法に則ったものであり、あくまでも文化財の保存と研究、およびそれに伴う展示・教育という流れの中で博物館の在り方を追求する立場を基本としなければならない。現状の複雑さに立ち向かうためには、基本を押さえなければならない。本学の学芸員課程では、その基本の認識と文化財の実際の取り扱い方と修復の基礎知識を学生に与える姿勢を崩しておらず、逆にこちらの方面を2004年度には、もう少し特化して、授業内容を充実させるべき策を予定している。後世にそれを伝えるために文化財優先策が必要とされる。

J) スポーツ科目（保健体育科目）

スポーツ科目は、スポーツ（体育実技）とスポーツ文化論（保健体育理論）およびスポーツ文化ゼミ、シーズン・スポーツ（ゴルフ、スキー、水泳）からなっている。スポーツでは、自らの身体を耕す主体者として、ソフトボール、バドミントン、パドルテニスなどの各種スポーツを導入している。年に2度行う体力テストは、学生の自覚的な健康や体力意識を促すきっかけにもなっている。生涯スポーツの観点からは、シーズン・スポーツとして自然とスポーツを台座に据え、集中講義形式で実施している。

また、スポーツ文化論では、実技実践を踏まえその意味や意義を論じる中で、実技と理論とが相互補完できるような構成をとっている。同様に、スポーツ文化ゼミでも、学生達のディスカッションを軸に、遊びとスポーツ、映像とスポーツなどの幅広い問題意識の醸成と実践に重きを置いている。

しかし、理想と現実の溝は否めない。将来的にスポーツ科目は、実技においても種目選択のセメスター制導入を検討しているが、上記の諸問題の克服が当面の課題である。

② 大学院共通教育

[研究目標]

学理の尊重という創立以来の伝統のもとで、大学院では学部での教育を発展させて実技と学理との更なる調和・総合を目指した共通教育科目を開設している。その目的は、それぞれの分野で美術の専門家たらんことを目指す学生に、必要な理論を学ばせると

同時に、芸術に対する社会的な要請など、より一般的な視点から自らを見つめる機会を提供することにある。

[現状]

大学院の拡大に伴って研究分野が専門化し、大学院全体の一元的な運営に問題が生じているのは前回の報告の通りである。大学院博士後期課程（博士課程）の設置によって各学科を横断するようなシステムを構築する契機は設定できたが、実際の運営上は未だに多くの問題があり、そのための施設整備も途上にある。

[課題]

上記のような問題点はあるものの、基本的な方向性は固まりつつあり、それに基づいて学部・学科間を横断した議論の場の創出、多様な創作の実践と理論とを総合的に研究する施設および講義内容を整備してゆくことが今後の課題となっている。

造形表現学部

造形学科

①教育目標

美術教育を夜間に行う学部として、基本的に全学生を“社会人”として扱うことを特徴とする。ボーダレス化する現代の社会において芸術の多様化においても社会人としての強い意識をもった表現活動を学ぶ場とし、中・高年者の再教育生涯教育の機会、さまざまなジャンルや年齢層を越えた美術教育を教育の基本理念としてかかげている。

一般入試による学生 70%

社会人入試による学生 30%

クロスオーバー化が進行している今日の絵画表現の中で本学科は各自が独自の表現世界を築けるような環境づくりを行うとともに、日本画・油画の基礎演習を行いながら、その枠にとらわれず概論・史論・技術論を学ぶとともにそれぞれの特徴を活かした古典技法を相互に学ぶカリキュラムを組み、さらに、版画・映像表現・立体造形・保存科学など関連したところから専門の分野までの美術教育の目標を組んでいる。

A) カリキュラム構成

カリキュラム概要

1, 2年次	3, 4年次
<ul style="list-style-type: none"> ●素描画、ドローイング ●造形技法（日本画制作・油画制作） ●古典技法（フレスコ・テンペラ） 	<ul style="list-style-type: none"> ●日本画制作
<ul style="list-style-type: none"> ●油画制作 	
映像（2年次）、版画（3年次）、史論（1～4年次） 立体（4年次）、保存科学（4年次）	

カリキュラム概要（表 -21）

1, 2年生

- ・日本画と油画のクロスオーバーな授業
- ・基礎過程の素描Ⅰ、素描Ⅱでデッサン・ドローイング（Ⅰ）前期（Ⅱ）後期を行っている。
- ・古典技法Ⅰ（絵巻模写）、古典技法Ⅱ（フレスコ）、古典技法Ⅲ（黄金テンペラ）、造形技法Ⅰ（混合技法）

3年生

- ・木版画、銅版画、材料学、古美術研究

4年生

- ・立体表現、保存科学
- ・ギャラリーヨコハマ作品展
- ・卒業制作展
- ・五美大展
- ・日本画専門と油画専門の教員が共通に担当している。
- ・平面表現を中心として、インスタレーション、立体などは、場所的、物理的、人的要素を考慮して行っていない。
- ・造形表現学部の教育目標として、定員 30%以上を社会人枠としていることは本学科においてもその定員を維持し、社会人の制作意欲は目を見張るものがあり、成果を上げている。

②教育効果

これまでの卒業生は、半数以上が創作活動に専念する道を選んでおり、なかでも大学院に進学する者が多くいる。そのほか、ゲームソフト・宝飾関係・舞台美術など、表現活動の場を異ジャンルに求める者も多く見受けられる。また、最近の傾向として博物館学芸員や美術セラピスト、幼児から中高齢者の創造教育を推進する美術指導者など、美術関連の専門職につく者も目立つ。

③研究活動

本学科としての共同研究は1つのテーマを2年ないし3年間に渡り提案し研究を行っている。

○和紙の研究

2000～2002年度

【2000年度】

古典和紙の特性を日本画・油画の両分野から素材研究し、新しい技法を追求する。特質を同じくする日本画の分野からさらに新しい可能性を引き出し、また特質の異なる油画の分野から新しい可能性を追求する。福井大学教育学部・柏健教授の協力を仰ぎ可能であれば福井大学学生とのジョイントを試み、本学の新しい分野への積極的な取り組みの姿勢をアピールする。さらに両分野を新しい1つの分野とした検証も試み、本学科として将来における研究テーマを実証することを目的とする。研究地-福井県

【2001年度】

1年目の研究の目的、日本画・油画の両分野からの素材研究の成果をさらに考察を進め、特質を活かした新しい和紙素材と言えるものを作ることを研究テーマとする。1年目の成果に絵画用和紙として改良された古典紙（雲肌麻紙、鳥の子）を研究室の研究紙として特厚雲肌麻紙、特厚鳥の子紙、白土入り特厚麻紙、白土入り鳥の子紙を制作する。また、それらを土台として2年目は別種の素材を白土以外の顔料を漉き込み、新技法との融合を試みる。研究地-福井県

【2002 年度】

2年間かけて行った古典手漉き和紙の研究成果を発表することを目的とする。研究室で発案し特別注文した古典紙（特厚雲肌麻紙、特厚鳥の子紙、白土入り特厚麻紙、白土入り鳥の子紙）に、各自が工夫した顔料や技法などをそれぞれ提案し、作品として具体化してみる。そして、日本画と洋画という境界を越えた新しい絵画表現の展開を示すことにより、日本独自の素材である和紙の可能性を再認識してもらう。

○額の研究 2003 年度ー

【2003 年度】

額縁と絵画表現の関係を研究する。

油彩画や日本画表具の在り方を再考察し、額縁と作品の関係を問い直し提示することを目的とする。

研究室が研究し考案した額縁を実際制作し、それと合わせた作品を制作することにより絵画表現の新しい展開の可能性を見出す。

④課題

新しい美術教育の10年先を見すえ、美術教育現場の最高学府として実践的芸術活動を、どう考え、どう捉え、どう表現していくか、これからの芸術はどうあるべきか、を問いつつ、あらゆる課題をテーマとしてかかげて大学という研究機関としてのレベルを高めていく。具体的な課題については以下のとおりである。

・年間カリキュラムの絵画制作における作品の充実（表 I -22）

	油画	日本画
1 年生	デッサン 2 点・ドローイング 3 点	デッサン 2 点・ドローイング 2 点
	静物油彩 30 号・人体静物油彩 50 号 2 点	植物写生 20 号 2 点・静物細密画 50 号
	風景油彩 15 号 2 点	風景画 30 号・植物画 30 号
	フレスコ画・混合技法	絵巻模写・フレスコ画・混合技法
	計 10 点以上	計 10 点以上
2 年生	デッサン 1 点・ドローイング 3 点	デッサン 1 点・ドローイング 1 点
	静物油彩 30 号・人体静物油彩 50 号 1 点、 50～80 号 2 点	人物制作 50 号 2 点
	風景油彩 15 号 2 点	風景画 30 号・自由画 30 号
	黄金テンペラ	動物習作 箔に制作 30 号・絹に制作 20 号 黄金テンペラ・絵巻模写
	計 10 点以上	計 10 点以上
3 年生	造形制作 100 号 2 点	自画像制作 50 号・樹木及び風景制作 50 号
	造形研究 100 号 2 点	動物制作 50 号以上・自主制作 1 点
	自由制作 100 号 2 点	群像 100 号以上・人物（墨彩）30 号
	終了制作 50 号 2 点	終了制作 100 号以上 2 点
	版画制作	版画制作
	年間提出作品 600 号以上	年間提出作品 500 号以上
4 年生	造形制作 ・ 造形研究 ・ 卒業制作	造形制作 ・ 風景写生・造形研究 ・ 卒業制作
	各自テーマを決め制作	各自テーマを決め制作
	立体制作	立体制作
	年間提出作品 600 号以上	年間提出作品 500 号以上

(表 -22)

- ・作家としての意識をもつための課題外作品制作と発表。
個展-複数の作品制作のため、表現する力と意識を高める。
コンクール-他者の作品の中にあって自己の作品のレベルを考察し、作品による自己表現を確立する。
公募団体への出品
- ・アトリエスペースの拡大（面積および容積）

⑤その他

志願者数を望む案

- ・地方へのアピールをする。
- ・環境設備の充実
校舎の新設（学校の計画に従う）
教員の研究室（教員の制作現場を見せることのできる環境）
デッサン室（基礎技術の向上）
共通工房（パネル制作、下地制作など）
図書談話室（画集の充実、教員と学生のコミュニケーションの場）
食堂（明るくておいしい食事）
パソコン室（情報収集のため）

デザイン学科

①教育目標

デザイン学科の教育・研究の基本的な理念・コンセプトは「コミュニケーション・デザイン」である。これは、人々のコミュニケーションとこれからのあるべき姿をデザインし提案していくということであり、またデザインという営為を通してコミュニケーションの豊かな可能性を試し広げ、社会に資していくということでもある。

ビジュアルデザイン分野では、「ポスターから **Web** デザインまで」をテーマに、グローバルな視点に立ち、より良いコミュニケーションのための知的複合情報の視覚化に必要なデザイン力と感受性を養い、情報環境のプランニング、コーディネート等、幅広い能力を育む。

デジタルデザイン分野では、「ヒトとデジタルの未来を創る」をテーマに、情報やグラフィックスやネットワークコミュニケーションをコンピュータを活用してダイナミックにデザイン表現する手法と意義を様々な角度やメディアについて学び、人と生活、社会のこれからの新しいあり方に貢献し得るデジタルデザインとその環境を探究し、制作、提案する。

プロダクトデザイン分野では、「モノづくりから情報のデザインまで」をテーマに、人間と道具のあり方について、ハード、ソフト、システムなど多角的な観点から探究し、新しい価値を提案するため、道具の形態やはたらきについて、使われる状況、人間の理解の仕方と行動等を総合的に学ぶ。

スペースデザイン分野では、「インテリアから環境まで」をテーマに、人間と環境のあり方について、バーチャルな空間概念から、現実的な住空間や都市空間に至るまでを対象とする。コンピュータによる空間イメージの表現や、デザインサーベイ、モデリング等の技術を身に付け、空間デザインの各分野を総合的に学ぶ。

このような教育・経験を通じて、本学科では、高度な専門的表現力と同時に、幅広いデザインの総合力をも身に付けた、21世紀のデザイン各界が求める新しい人材を育成している。

なお、本学科では、日本で唯一の夜間開講デザイン学科という特長を生かした、社会人への再教育をととも重視し大きな実績を持っている。また3年次編入学者に対しても、きめ細かく指導が行えるよう柔軟なカリキュラムが用意されている。

[実態／評価／対応]

インターネットなどの告知、開示により社会人の入学が増加しており、その教育効果は着実に上がっている。また異分野交流のゼミの効果により、多様な教育効果も上がっている。

②カリキュラム構成

2年次前期までは基礎過程として、デザインをやっていく上で必要な、考える力、観察する力、造形表現する力、またコンピュータを道具として自由に扱うことができる力などを身につけることができるカリキュラムが用意され、入学時の志望専門分野に関わらず、自由に選んで学ぶことができる。

2年次後期からは、ビジュアル、デジタル、プロダクト、スペースの4つの専門分野に分かれ、より高度で先端的な学習と制作に入る。

また、本学科の特長である、分野・ジャンルの垣根を越えた交流・学習をめざしたテーマ別のゼミナールも多数用意されている。

また1年間を5つのセッションに分け、様々な専門分野のカリキュラムが構成されている。特徴的なのは3年次に開講された専門分野を跨いだゼミが多数開講されている。

[実態／評価／対応]

セッションが同時進行するために、セッション末になると学内のファシリティや教員に負荷がかかる。できるならばセッション末をサミダレ式にづらす工夫も必要であろう。それにより負荷が分散でき、教員も他の講評会に出席も可能である。

③教育効果

4つの分野「ビジュアルデザイン分野」「デジタルデザイン分野」「プロダクトデザイン分野」「スペースデザイン分野」が1つの学科に集約されている効果は絶大である。つまり今後のデジタルを含むデザイン創作、活動において、縦割りの壁は大きな障壁であるからである。

そして社会人を多数入学させていることにより、若年層の学生に多大な影響を与え、教育の「質」向上に寄与している。

[実態／評価／対応]

社会人に開かれた学部を目指し、その社会的効果、学内学生への好影響、全体の質向上にも貢献しているが、社会人学生が昼間の仕事と夜間の学業を4年間両立させることは、時間的、経済的に負担であることが見受けられる。

④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員は教育の質向上と、技術の進歩に伴う社会からの要請に応えるべくクリエイター、デザイナー予備軍としての教育プログラムの立案を行う。あわせて、コンピュータなどを使った先進的な教育を行う。非常勤教員の役割は、社会で先進的に実践している手法、コンセプト、技術などを応用し、専任教員では補えない部分の教育を実践している。

[実態／評価／対応]

専任教員の人数が減少しており、負荷が増大している。

非常勤教員においては、教育内容を陳腐化させないために、新たな非常勤教員への交代が必要である。

⑤学科運営の意思疎通

授業の進行、学生への指導などあらゆる問題は学科内の月例会議により、活発な意見交換により解決されている。

特に本学科の意思疎通、コミュニケーションは垣根を作ることなく良好なことは特筆すべき特徴である。

[実態／評価／対応]

学科内専任教員全員との意志疎通は極めて良好である。

⑥ 研究活動

実施年度	研究区分	研究名	担当教員	相手先
2000年度	産学	インホイール・モーターによる電気自動車デザイン・プロジェクト	武正秀治	協力：慶応義塾大学環境情報学部（清水研究室）、川崎市産業振興課
	産学	モバイル情報機器の研究	植村朋弘	協力会社：(株)日立製作所デザイン研究所
2000年度～2003年度	学内	メディア空間のビジュアル・デザインと構築法の研究開発	植村朋弘 須永剛司 永井由美子	協力：日本学術振興会・未来開拓学術研究
2001年度	産学	車体利用広告デザイン自主審査基準作成	太田幸夫	協力：東京都都市計画局建築指導部 / 東京屋外広告協会他
	学内	公共交通サイン（視覚言語）コミュニケーションデザイン	太田幸夫	協力：東京都交通局他
	学内	視覚言語の研究開発	太田幸夫	協力：AM デザイン事務所ア・ロン・マ・カス代表他
	産学	画面操作における知識空間のデザインに関する研究	植村朋弘	協力会社：(株)シーズ・ラボ
2001年度～2002年度	産学	「非破壊糖度計・アマイカ」の商品デザイン開発	武正秀治	協力：(株)アステム、川崎市産業振興課
2002年度	学内	広域避難場所表示シンボルのデザイン	太田幸夫	協力：防災情報機構 NPO 法人他
	学内	広域避難場所誘導サインの視認効果実地検証	太田幸夫	協力：NPO 法人ル・バンデザイン研究所、上田市役所他
	デジ タマ	通信放送融合型電子行政サービスシステムの開発	太田幸夫 猪股裕一	協力会社：(株)デジタマ、パナソニック デジタル ネットワークサーブ(株)
	デジ タマ	デジタルTVを活用した行政情報提供サービスシステムの開発	太田幸夫 猪股裕一 植村朋弘	(株)デジタマ、松下電器産業(株)、パナソニックシステムソリューションズ社
	産学	モーターを使った未来商品のデザイン提案	武正秀治	協力：オリエンタル・モーター(株)
	産学	デザインプロセス・新商品デザイン提案プロジェクト	武正秀治	協力：(株)東芝、キャノン(株)、ソニー(株)
	産学	蓄光素材による新商品デザイン提案プロジェクト	武正秀治	協力：(株)ブリッジワークス
	産学	ロボットの音声デザインの研究	植村朋弘	協力会社：日本電気(株) マルチメディア研究所他
2002年度～2003年度	学内	上野毛地域の文化的環境形成の研究	山中玄三郎	協力：五島美術館、世田谷区役所

2003年度	産学	アルミ展示パネル「アルパス」 研究開発	太田幸夫	協力：立山アルミニウム工業(株)
	学内	新蓄光性避難誘導標識の視認性 実験	太田幸夫	協力：名城大学藤田晃弘助教授、防災情報機 構、根本特殊化学他
	学内	国際安全標識のピクトグラムの 研究	太田幸夫	協力：ISO / TC145 / SC2 国内対策委員会
	デジ タマ	老人介護施設向けのタイルカー ペット施工デザイン及び監修	太田幸夫 猪股裕一	協力会社：(株)デジタマ、(株)リバル
	デジ タマ	次世代Web端末の開発	太田幸夫	(株)デジタマ、三洋電機(株)
	学内	江戸川区の地場産業「伝統工芸」 の新規商品デザイン提案	武正秀治	協力：江戸川区産業振興課、江戸川区伝統工 芸者2団体

研究活動一覧(表 -23)

学内：学内共同研究、産学：産学共同研究、デジタマ：デジタマ共同開発

⑦ 就職支援

企業からの求人に対して、活発な応募や教員による支援がなされている。

[実態／評価／対応]

就職課からの求人、求職の情報が脆弱なために、インターネットを使った求人情報を提供すべく準備中である。

⑧ 課題

優秀な成績で卒業してゆく学生の中に社会人学生が極めて多く見受けられる事実からも、本学科の質を向上するうえで社会人学生をなるべく多く採用すべきである。その対応として、すでに大学を卒業またはそれと同等な資格を取得している入学生に対し、既取得単位に相応する「既取得単位の減免」措置が急務である。また高校や予備校だけでなく、社会人に対する本学科の教育内容やファシリティの告知、広報活動も急務と考える。

平成元年の美術学部二部開校時から率先してコンピュータを多用した教育を行って来たが、コンピュータ本体の低価格化、ソフトウェアのバージョンアップにかかる膨大な費用、インターネットなどのネットワーク費用など、当初の予算体系も著しく変化している。入学時に学生にコンピュータ関係の購入を義務づける方策も考慮する余地がある。

[実態／評価／対応]

少子化による受験生の減少は避けられない。ゆえに本学科の特徴、差別化が求められている。そのもっとも大きな特徴は都内唯一の社会人に開かれた、デザインを主体にした、夜間の大学であることは言うまでもない。その特徴をますます告知・広報活動をすべきである。社会へのデザイン学科の告知・広報を広く強く行ないたい。本学科独自のインターネットでの告知・広報もますます充実させていきたい。

映像演劇学科

①教育目標

映像および演劇の領域にかかわる、あるいはそれら両領域をまたいで、清新な創作活動や表現活動を目指そうとする全ての者に、「表現」する精神とともにそれらの基礎を修得させ、創作者をはじめ広く文化産業に寄与する人材の育成を目的とする。

[実態／評価]

「表現」する精神とともにそれらの基礎を修得させる教育方針は着実に浸透している。また映像と演劇をコース分けしない、両方ともに体験出来るから良いとする声が受験生から聞かれるのもその証しと思われる。映像と演劇を往還するユニークな学科の声。

②カリキュラム構成

四つの柱で構成する。(1)スタディ系授業群（歴史、概論、各論など理論研究）(2)メソッド系授業群（基礎的技術・技法、表現の方法開発など演習型）(3)FT系授業群（学年枠を越えて企画を立ち上げ創作し公開する実作実習フィールドトリアル）(4)卒業制作（個人またはグループによる企画作品の制作または研究論文）。これら柱を貫通するカリキュラムのテーマは学生個々に内在する「企画力」および「表現力」の覚醒・抽出とともにそれらの伸張・伸展をめざすことにある。

[実態／評価／対処]

「表現」する精神は、「企画」を提案し、グループを立ち上げる姿の中に明確に現れる。これを実作に繋げる過程で、(a)機器機材の絶対数が不足、その機種も老朽化著しく至急な更新が必要 (b)学生が集うミーティングルームや工作室がなくプレハブでも急場を凌ぎたい (c)講堂、映像スタジオなど本学科の拠点となるべき施設管理が大変不便で改善の余地あり、などの問題が山積しているのが現状である。

本学科は、①入試を変える＋②授業を変える、を合い言葉に改革に着手した。その第一弾が自己推薦入試「生き方オーディション」である（2005年度入試実施予定）。

③教育効果

映像と演劇を区切らない（コースに分けない）両領域横断型の授業形態が学生の活気ある創作活動として定着しつつある。その証拠に年間200を越える企画が立ち上がり公開されている現状とともに卒業生の活躍が挙げられる。キャンパス中が常に劇場なのだ、という本学科の姿勢が徹底され注目されつつある。

[実態／評価]

各種の映像コンクールなどの受賞者や本学科の卒業生で作る劇団など、卒業生の活躍が目立って来た。これも創設15年の成果である。そうした卒業生を臨時の講師として招くなど、現役学生とのネットワークを組み上げる時期が来ていると考え、そのいくつかは実行して来た。

④専任教員と非常勤教員の役割

在籍学生総数 300 名に対し、現在、専任教員 10 名が主にカリキュラムの柱(3)と(4)の指導に徹底して張り付き、学生の「企画力」および「表現力」の覚醒と伸張に努めている。非常勤教員は外部から最新の映像や演劇の研究方法及び創作・表現の今を注入することを任務に、主に(1)と(2)を担当している。

[実態／評価]

昼夜間型の授業展開には一層充実した非常勤教員の補充が必要であり、その骨格や陣容についても検討に入った。また専任教員の着実な研究または創作の成果が厳しく問われる。将来は科学研究費補助金を申請し得る陣容を整えなければならない。また行政や教育機関との連携をも目指さなければならない。現在、そうした対外的な成果に乏しいのが現状であるのは否めない。

⑤学科運営の意志疎通

授業の進行状況、年間行事、学生の生活指導など多岐にわたる諸問題は月例の学科会議を通して、また中期計画などについては集中学科会議を頻繁に起こし、常に学科の教育姿勢が徹底されるよう立案、検討が重ねられている。特にこれらには必ず助手・副手も出席させ、その提案を重視し、機会ある毎に軽食会を兼ねたミーティングによって些細な問題をもフォローしている。

[実態／評価／対処]

学科の方針は全スタッフの出席する学科会議で一切を協議し決定している。今後もこの方針は貫く。中でも鍵を握るのは、機材機器を管理し、授業進行を補佐し、学生の動向を身近に知る助手・副手の意見は重視したい。学生が助手・副手を頼るケースは万事に及び、従って教育効果の充実とともに学科内の意志疎通の密度を上げるためにも優れた助手・副手の役割は重要であると考えている。

⑥就職支援

卒業生の紹介などを含め日常の中で個々の相談に応じる。

[実態／評価／対処]

学部全体でのキャリア教育、求人開拓にも工夫が必要。

⑦課題

特に社会人を優先入学させるべき造形表現学部にあつて、頻繁な創作活動を中核に据える本学科では社会人の時間的な制約が大きな負担ともブレーキーともなつて、せつかくの職場を放棄する例もある。

[実態／評価／対処]

特に大卒社会人には彼ら優先の「ゼミ」など高度な授業内容が必要。これらは学部特有

の問題として工夫すべき。だが議論はないのが実情。

共通教育（造形表現学部）

①教育目標

共通教育は、各学科の専門教育との関連を考慮しつつすべての学生に共通して必要な一般的教育をめざしている。それぞれの専門教育において、学生は創作・表現活動を行うべく専門的な技術や知識を学ぶ。しかし、それを使ってなにを創り、表現するかは各人の一個の人間としての生きかたと深く関わって来ざるを得ない。共通教育は、このような人間形成の基礎となる総合的な一般教養を培うことを目的とする。共通教育と専門教育は、いわば、車の両輪のごときのものであり、両者が調和をたもちつつ有効に機能することによって創造的なリーダーシップのとれる人材の育成をめざす。

豊かな人間形成のために最も重要な点は、人間とはなにか、どうあるべきかということについての絶えざる問いかけの姿勢を獲得することである。昨今、教養とはなにかについての議論が盛んであるが、この問いかけを、より総合的でより深いものとするための努力こそが真の教養とよばれるべきものであろう。このような姿勢の獲得のために、共通教育では、総合講座科目を設置している。ここでは、自然および社会と人間との関係をできるだけ多角的にとらえること、真・善・美などの価値にたいする哲学的な問いを機軸として人間の幸福についてのより深い理解が目的とされている。基礎理論科目では、各学科（造形、デザイン、映像演劇）の学生に共通する実技系の基本講座を設けることで、学科の仕切りを越えた新たな創造の可能性を探求する。外国語科目では、多様な思考形式の理解と国際的なコミュニケーション能力の獲得を目指し、地球的視点に立った問題意識と創造力を喚起する。体育系実技科目では、身体の健康の保持としてのスポーツの重要性を認識し、精神・肉体のバランスの取れた人間形成を目標とする。その他、博物館・美術館のキュレーターを目指す学生を対象とした学芸員資格取得のために必要な科目が編成されている。

②現状

共通教育に所属する教員が研究代表者として行なった学内共同研究として、2000年度に「大学における芸術と社会人教育について、---社会人学生と一般学生の共生---」がある。この研究では、一般学生の社会人学生への関心度をさぐった。その前年度（1999年度）の社会人学生および社会人学生卒業生が一般学生に対してもっている関心度の研究調査の裏付けとしての意味も含めて行なわれたものである。大半の一般学生は社会人と共に学ぶことに共感し、学習・研究の面のみならず私的にも影響を受けている実情が明らかになった。研究の方法としては、造形表現学部の一般学生にアンケート調査を行い、その調査結果を踏まえての、各研究分担者の研究報告と討論を重ねた。アンケート調査は、「一般学生と社会人学生の共生について」をタイトルとして質問を作り、また、自由に意見を記述できる欄も設けた。一般入学の学生を対象にし、実施期間は平成12年9月から12月までの3ヶ月間、回答数は186件であった。

2001年度には、「美術大学における教養について、---言語表現の在り方とその可能性について---」の研究を行なった。「教養」という主題を軸心に、新しい外国語のカリキュラムの検討・作成、さらに「ことば」についての基本的な研究発表・討論を行なった。この研究成果は、今後のカリキュラム改革に生かすことを念頭において行なわれたものである。

2002, 2003年度は、「総合的な視点からの、芸術におけるバロックの分析と考察」を行なった(2004年度も継続中)。バロックの概念が芸術様式の分析のためのメルクマールとして重要なことは周知の事実である。しかし、個別の芸術分野でのバロック様式研究はあっても、多様な芸術分野を貫いた共通のバロック概念についての研究はこれまでほとんどない。本共同研究は、多様な芸術ジャンルの専門家のそろっている本学、造形表現学部の長所を生かし、さらに学外からの研究者をも含めて研究分担者をより充実させて、総合的な視点からバロック研究を行なうものである。2002, 2003年度に行なった研究会で、各研究分担者の分担領域に関する発表を全員が終えている。従って、演劇、音楽、美術(西洋と日本)、文学、建築、都市に関してのバロック概念の検討の、具体的な事例がかなり充実した形で出揃ったことになる。この結果を土台とし、出版社との打ち合わせを済ませ、書物「バロック研究」(仮題)の出版の計画を実行しつつある。その中には、コラム、重要語句の用語解説、作家解説、文献表、概略年表、図版などを含めて、内容の充実をはかる。その結果に基き、さらに総合的な視点からの考察を加えて完成させたい。今後のカリキュラム改革では、ひとつのテーマを設定して、複数の講師によって構成される多元的授業の可能性も模索されており、その検討のためにも本共同研究の成果が生かせるのではないかと期待される。

このほか、生涯学習センターを中心に、広く学外の一般市民を対象として行なわれている生涯学習講座にも共通教育の教員が積極的に協力しており、その経験が学内の学生に対する授業に反映されるとともに、大学の地域貢献および地域住民との交流に資するところが大きい。

③ 課題

社会人に対して、より学びやすい環境を整えること。昼間に就労して、夜間に学ぶことを考えれば、社会人の様々な負担は大きなものがあり、学内の環境のみならず一般社会や企業と広く連携した環境の整備が必要である。学内においても、授業時間の検討や、一般学生とのよき相互影響の促進のための方策などを考える必要がある。

社会人に限らず一般学生をも含めた全体的な問題としては、第一に、総合講座の充実がある。講座の精選や補充、また、一つのテーマを複数の講師によって扱う授業の創設によって、総合性の質をより高めることも考えられる。さらに、学生が主体的に授業に参加し、自らの考えを整理し、説得力のある言葉でメッセージを伝えられるような能力を養うために、ゼミ形式のクラスを開設する必要もある。次に、基礎理論科目の充実としては、デッサン、写真、版画、コンピュータ・グラフィックスなど各学科の学生が共通して関心をもっている実技系の科目を、共通教育が率先して提案し新設する可能性もある。また、外国語に関しては、教育方法の改革のみならず、学生の外国語習得に対する基本的モチベーションを高めるための方策が重要である。これは、大学の国際化の努力とも方向を一にする。たとえば、外国人講師の短期・長期の招聘、国際的シンポジウムやイベントの頻繁

な開催などである。体育実技科目の充実は、学生の心身の健康を保ち、促進する方向で真剣に検討されなくてはならない課題である。芸術創作系の大学であることや夜間を中心としたかなり過密なカリキュラムが要求されることも重なり、心身の不調を訴える学生が少なくない。学生相談室の開設などによって既に対策が取られているが、健康教育や実際に体を動かすことによって心身のバランスを保つことはこれからますます必要になるであろう。

※学生・卒業生の受賞歴については、2000～2003年度の実績のみ表示した。

3. 入学試験（特別入試）

入学試験の選抜方法は、大別すると、一般選抜、推薦選抜、特別選抜に分けられる。本学では、大学自身や社会を取り巻く環境、教育制度、高等学校の教育組織編成等の変化に対応し、社会及び受験生の多様なニーズに応えるため、下記の入学試験を実施している。

美術学部 一般入学試験
 大学入試センター試験利用入学試験
 外国人留学生入学試験
 帰国子女入学試験
 3年次編入学試験

造形表現学部 一般入学試験
 社会人入学試験
 3年次編入学試験

大学院博士前期（修士）課程入学試験
 大学院博士後期（博士）課程入学試験

美術学部及び造形表現学部の一般入学試験（美術学部大学入試センター試験利用入学試験、造形表現学部社会人入学試験を含む）については、入学・卒業グループで報告することとし、ここでは外国人留学生入学試験、帰国子女入学試験、3年次編入学試験、大学院博士課程入学試験など多様なニーズに応える特別入試について報告する。

①美術学部外国人留学生入学試験

[ねらい]

世界から引きつけた優れた人材が、日本人学生と交流を持ち、互いに刺激しあうことで、世界水準の質の高い美術創作が出来る環境を構築する。

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	28	25	9	8
2002年度	24	24	9	8
2003年度	49	42	15	14
2004年度	44	41	17	15

(表 -24)

[点検・評価]

日本語による小論文と面接試験を課し、質の高い学生を確保するために慎重な選考を行っている。その為留学生は日本語面で不自由することなく授業に参加している。

③美術学部帰国子女入学試験

[ねらい]

現代社会のニーズに応え様々な入試を実施している。国際化が進む現在、海外生活を通じ、異文化で得た貴重な経験や感性を本学で発揮させる狙いがある。

また、帰国学生が入学することにより、留学経験がない学生に大いなる刺激を与える相乗効果も期待している。

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	24	20	7	5
2002年度	17	15	4	2
2003年度	19	18	8	8
2004年度	10	9	3	1

(表 -25)

[点検・評価]

試験は各学科（専攻）とも小論文、実技試験、面接で判断しており、海外生活で身につけた異文化の理解力と、母国の客観的な理解が本人にどのように影響をしているかを見ている。結果として非常に勤勉な学生が多く、成績も優秀であり、周囲の学生においても良い相乗効果が得られている。

④美術学部3年次編入学試験

[ねらい]

進学率の上昇や社会の多様化等、現実社会の動きによって、3年次編入学試験は、短期大学、専修学校卒業生等に多様な進路選択とさらなる学修機会を与えるうえで有効な試験制度である。

また、本学生にとっては在学途中からの外部からの入学者の受入れは互いの刺激となつて、大学全体の教育の活性化に一役かっている。

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	62	57	18	16
2002年度	74	73	14	10
2003年度	57	52	15	12
2004年度	55	48	22	18

(表 -26)

[点検・評価]

志願者数については2年目をピークに減少傾向にあるが、それでもなお当初見込んでいた以上の志願者数を確保できている。しかし、受験者数の減少（未受験者の増加）が2004年度入試にやや目立つ結果となったことに先行きの不安が危惧される。

導入してまだ4年と大きな傾向がつかみにくい状況にあるが、今後この減少傾向が顕著になった場合には、より具体的な募集ターゲットの明確化が必要になると思われる。

なお、合格者数に注目すると前3年間に比べ2004年度入試が大きく増加している。これは本学が3年次編入生の受け入れに対して教育指導上の指針が明確になってきたことの表れであり、今後もより積極的に募集していきたい入試形態であることは間違いない。

⑤造形表現学部3年次編入学試験

[ねらい]

優秀な学生の確保。

大学・短大・高専・専門学校の在籍者や卒業者が、取得した単位を生かして新たに芸術を志す目的意識の高い優秀な学生を確保するため3年次編入学を実施している。

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	37	35	9	7
2002年度	44	43	11	11
2003年度	26	24	9	9
2004年度	38	36	13	13

(表 -27)

[点検・評価]

2001年度より3年次編入学試験を実施。

毎年、若干名の募集だが、編入学の目的である「優秀な学生の確保」は達成されていると思われる。（2002年度からは、合格した受験生が、すべて入学している。このように、芸術（入学）を強く希望する3年次編入学者にきめ細かく指導が行えるよう、また既に修得した基礎教育科目に対し、重点的に専門教育科目を受講できるようカリキュラムの構成も検討を続ける必要がある。

また、造形表現学部から美術学部への転部試験も実施している。

⑥大学院博士前期（修士）課程入学試験

[ねらい]

美術・デザインについて学部で得た知識・技能を深め豊かにする人材を求める。また、本学出身者にとどまらず外部からの優秀な人材をより多く獲得する

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	128	126	99	93
2002年度	166	164	124	122
2003年度	144	141	119	110
2004年度	152	150	129	123

(表 -28)

[点検・評価]

年々、外部からの入学者が増加している。デザイン専攻はポスター等を作成するなど、広報活動の成果が見られた。

⑦大学院博士後期課程入学試験

[ねらい]

修士までの専門の細分化をするのではなく、創作と理論のバランスがとれた総合的な人材を育成するため、幅広い興味やチャレンジ精神の持ち主を発掘したい。

美術に関する研究者、新たなメディアの進展に対応する人材養成のために募集を行う。

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	11	11	9	8
2002年度	10	10	5	5
2003年度	11	10	4	4
2004年度	7	7	6	6

(表 -29)

[点検・評価]

志願者は外国人も多く、国際色豊かな、幅広い人材を確保することができている。しかし、2003年度に完成年度を迎えたばかりであるので、国内外ともに認知度が低いのではないかと懸念される。

4. 国際化

本学の理念は、「国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナーならびに教育研究者等を育成することを目的とする」と高らかにうたわれ、また「国際的な美術家やデザイナーが集まる創造的な環境を構築する」と述べられている。本学はこの理念の実現のために努力し、国際交流委員会はそのためのサポートを積極的に行っている。以下、そのサポートの現状について述べる。

本委員会は月に1度開催されている。各学科から選出された委員、ならびに教務部長、学務課長、教務部職員ほかが出席し、過去1ヶ月の間に進行した交流関係の諸事を報告し、また今後の展開について議論を交わしている。本委員会は、本学における国際的な交流に関する事柄をほぼ全てにわたって掌握し、必要なアドバイスや協力を行っている。

過去4年間において、本委員会が積極的に関与した重要なイベントは、(1) 東京国際ミニプリント・トリエンナーレ (2002年4月28日～6月30日) と (2) 日韓中教授作品交流展 (2002年11月13日～12月8日) である。3年毎に開催される東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展は、オープン・コンペによって選ばれた世界の版画を一同に集めて展示・紹介している。日韓中教授作品交流展は、本学の交流関係にある東亜大学校 (韓国)、清華大学美術学院 (中国) と合同で教授作品、計105点を集めた展覧会で2002年度は本学が主催校となった。

本学の他大学との交流協定状況は、次のとおりである (表 I -30 参照)。

協定大学名	所在地	協定締結日	交流事業名	協定内容
清華大学 美術学院	No. 34 Dongsahuan Middle Road. Beijing, P.R. China 100020	1991.11.02 再締結 2001.06.03	王明旨院長来訪 (1999.10.08) 日韓中教授作品交流展 (1998.10.18～10.24) (2000.01.25～01.30) (2002.11.12～12.08)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流 ・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項
弘益大学校	72-1 Sangsu-dong, Mapo-ku, Seoul 121-791, Korea	1996.06.17 再締結 2001.07.16	弘益大創立50周年記念展 (1996.10.21～10.26) 多摩美術大学と弘益大学 校との学生交流に関する 覚書締結 (2003.12.16)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流 ・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項
東亜大学校	840, Hadan-dong2, Saha-ku, Pusan 604-714 Korea	1996.07.31 再締結 2001.07.31	日韓中教授作品交流展 (1998.10.18～10.24) (2000.01.25～01.30) (2002.11.12～12.08)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流 ・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項
ヘルシンキ美 術大学	Hmeentie 135C, FIN-00560 Helsinki,	2000.11.04	短期交換留学 毎年(09.01～12.31)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流

IV. 教育研究

協定大学名	所在地	協定締結日	交流事業名	協定内容
	Finland			・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項

外国大学との交流協定状況（表 -30）

本学を訪問する外国の要人は、非常に多い。2000，2001年度は数件であったが、2002年度は13件、2003年度は22件であり、その訪問者数は年々増加の一途を辿っている。本委員会は、時間の許す限り、訪問者と接触し、本学についての知見を深めてもらうと同時に、本委員会のメンバーもまた、外国の諸大学が求めているものを理解しようと努めている。以下は、国際交流の記録である（表 I -31 参照）。

年月日	所属機関・職位	受入部署
2003.11.02	国立雲林科技大学 林聡明 校長	教務部
2003.10.31	シルバコーン大学 シティチャイ グラフィックアート学科長	版画
2003.10.29	グリフィス大学 ポール・ジョリー学長代理	国際交流委員会
2003.10.28	シルバコーン大学/多摩美術大学 絵画学科版画専攻交流展	版画
2003.10.16	ロッテルダム芸術アカデミー リチャード・アウエルケルク学長	国際交流委員会
2003.10.08	スタンフォード大学 ディレクター サラ・リトル・ターンブル先生	デザイン
2003.10.07	シドニー・カレッジ・オブ・ジ・アーツ ロン・ニューマン学長	国際交流委員会
2003.10.03	ロイヤル・カレッジ・オブ・アート テキスタイル主任教授 クレア・ジョンストン	生産デザイン（テキスタイル）
2003.10.03	ヘルシンキ美術大学 ユリアナ・レバント副学長夫妻 インテリア&プロダクトデザイン教授 ユリヨ・ウィヘルハイモ	国際交流委員会
2003.09.26	シルバコーン大学 タボーン副学長	版画
2003.09.25	ソウル芸術大学 教務課長兼文芸創作科教授 イ・グァンホ	国際交流委員会
2003.09.19	シンガポール共和国大使館 一等書記官（産業）陳威翔	総務部
2003.08.07	ラオス外務省 ソムサクート大臣閣下	美術館
2003.07.11	シドニー・カレッジ・オブ・ジ・アーツ ロン・ニューマン学長	国際交流委員会
2003.07.10	ASEAN 諸国大使閣下	美術館
2003.07.01	中央美術学院 許平副教授	国際交流委員会
2003.06.20	フンボルト大学	情報デザイン
2003.05.14	サウサンプトン大学 ウィンチェスター・スクール・オブ・アート 絵画学科長 ステファン・クーパー	国際交流委員会
2003.04.16	ソフィア国立美術アカデミー スヴェトザル・ベンチェフ助教授	国際交流委員会

IV. 教育研究

2003.03.29	中国美術学院 宋建明副院長	国際交流委員会
2003.03.18	中央美術学院 潘公凱院長 他 5 名	国際交流委員会
2003.01.27	王立メルボルン工科大学 マーレイ国際交流委員長	国際交流委員会
2002.12.13	清華大学美術学院	美術館
2002.12.13	東亜大学校芸術大学	美術館
2002.11.19	アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン リチャード・コシャレック学長	国際交流委員会
2002.11.15	サウサンプトン大学ウィンチェスター・スクール・オブ・アート テキスタイルデザイン学科長 ロブ・ハドルストン	国際交流委員会
2002.10.16	シルバコーン大学 シティチャイ教授	版画
2002.10.08	バルセロナ美術大学 アントニア・ピラー副学長	国際交流委員会
2002.10.07	グリフィス大学 ラッセル・クレイグ教授	国際交流委員会
2002.07.01	ヘルシンキ美術大学 タピオ・ユリ・ヴィカリ教授	国際交流委員会
2002.05.22	タリン芸術工業大学 機械工学デザイン ティート・ティーデマン助教授	国際交流委員会
2002.05.21	漢陽大学 学長・副学長・デザイン教授	国際交流委員会
2002.04.08	サウサンプトン大学ウィンチェスター・スクール・オブ・アート テキスタイルデザイン学科長 ロブ・ハドルストン	版画研究室
2002.01.22	清華大学美術学院 環境芸術学部長	国際交流委員会
2002.01.07	ヘルシンキ美術大学学生作品展(テキスタイル棟にて)	生産デザイン(テキスタイル)
2001.11.21	上海市教育委員会	総務部
2001.06.30	ジョー・ブライス氏(日本美術研究者)	国際交流委員会
2001.03.22	アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン リチャード・コシャレック学長	国際交流委員会
2000.12.21	清華大学学院 呂振華自動車工学部長以下 7 名	生産デザイン (プロダクト)
2000.11.24	サウサンプトン大学ウィンチェスター・スクール・オブ・アート テキスタイルデザイン学科長 ロブ・ハドルストン	生産デザイン (テキスタイル)
2000.11.04	フィンランド国立ヘルシンキ美術大学 ユリヨ ソタマ学長	国際交流委員会

国際交流の記録(表 -31)

本委員会は本学に留学する学部学生、大学院学生ならびに、研究生を積極的にサポートしている。本委員会は、学生部と共催で留学生のための懇談会その他を開いて、留学生が抱える諸問題の解決に取り組んでいる。2004年9月には本部棟内に「国際交流コーナー」を設け国際交流の充実に努めている。本学の留学生の在籍状況は以下のとおりである(表 I -32 参照)。

外国人留学生は、韓国、中国、台湾など東南アジアからの受入れが多い。受入れ態勢は各学科によって若干異なっているが、私費留学生のほかに、国費留学生として大学院、研究生への受入れも多い。特に本学の留学生の場合は、既に本国において制作等の経験があり、専門性を求めて入学を希望してくる者が多く学業成績も優秀である。

本学は制作を通して、学生同士、学生と指導教員との結びつきが強い校風を持っているた

IV. 教育研究

め、さまざまな国出身の外国人留学生についても、学生個々の領域に合わせた柔軟かつきめの細かい指導が可能である。

日本語の修得においてはそれなりに困難を感じているようであるが、周りの友人に助けられたり、留学生の個々の領域に合わせたきめ細かい指導などを通じて、国際交流の役割を果たしている。日本人学生や出身国の先輩留学生をチューターとして、サポート体制を検討している学科もある。

年度		韓国	台湾	中国	マレーシア	イギリス	イタリア	イスラエル	ドイツ	アメリカ	ポーランド	ラトビア	ポルトガル	フィリピン	ペルー	オーストラリア	合計	総合計
2000年度	学部生	28	10	2		1		1									42	
	大学院生	14	2	4					1								21	71
	研究生	5	0	1				1								1	8	
2001年度	学部生	29	8	2		1											40	
	大学院生	17	3	3				1	1								25	81
	研究生	10	0	3		1	1		1								16	
2002年度	学部生	26	10	3		1											40	
	大学院生	24	2	4		1	1	1	1								34	81
	研究生	6	0	1													7	
2003年度	学部生	27	7	5	1												40	
	大学院生	21	2	5		1	1	1	1								32	85
	研究生	5	0	2						1	1	1	1	1	1		13	

留学生在籍状況(表 -32)

なお、本学は毎年、姉妹校であるヘルシンキ美術大学に学生を1名送り出しているが、本委員会はその選考責任の一旦を担っている。将来は、本学と姉妹校関係にある中国や韓国、あるいはタイなどの大学に学生を積極的に送りこみたいと願っており、そのための準備の一環ともなる「中国語」のコースや「韓国語」のコースが開講されている。

最後に、本学は毎年海外研修を希望する教師を海外に送り出している(表 I -33 参照)。

IV. 教育研究

研修期間	研修先	学部・学科	氏名	研究課題
2000.05.08～ 2000.08.06	アメリカ ポルトガル スペイン 他 9 カ国	版画	森野真弓	アメリカ、ヨーロッパにおける版画の実情調査と表現研究
2000.06.09～ 2000.07.23	スペイン イタリア	造形	松下宣廉	スペイン絵画及びイタリア美術の研究
2000.07.15～ 2000.09.16	イギリス フランス スペイン 他 7 カ国	生産デザイン (プロダクト)	和田達也	ユニバーサルデザインの研究。欧州におけるユニバーサルデザインの実態と調査研究及び欧州大学におけるプロダクトデザインの教育の調査
2000.09.15～ 2000.11.16	ドイツ スイス フランス	グラフィックデザイン	草深幸司	構成主義ポスターの研究。1920年代からBauhausを起点にして発展してきた機能的・即物的・合理的グラフィックデザインの技法・思想を現代的観点から考察。
2001.06.21～ 2001.08.18	台湾	共通教育 (美術学部)	清田義英	台湾の仏教・宗教制度の研究
2001.06.24～ 2001.10.18	ロシア スウェーデン デンマーク 他 10 カ国	環境デザイン	岸本章	伝統的な環境の保存と再生に関する調査研究
2001.07.25～ 2001.09.20	イギリス スウェーデン ドイツ 他 2 カ国	映像演劇	檜山茂雄	映画文化の保存・展示とホログラフィ研究
2001.07.29～ 2001.09.21	ドイツ フランス 韓国	工芸	伊藤 孚	ガラス造形
2002.07.11～ 2003.03.31	ドイツ フランス イギリス 他 2 カ国	芸術	建島 哲	第二次大戦後の美術の比較美術史的研究
2002.07.15～ 2003.03.31	イギリス カナダ フランス 他 5 カ国	情報デザイン	港 千尋	19世紀民族学写真とそのデジタル化の研究
2002.07.15～ 2003.09.30	フランス イタリア ドイツ 他 3 カ国	共通教育 (造形表現学部)	小穴晶子	フランス 18 世紀の音楽美学
2002.09.02～ 2003.02.28	アメリカ ドイツ イギリス	生産デザイン (プロダクト)	安次富隆	最先端プロダクトデザインスキルの調査研究
2003.06.01～ 2004.03.31	アメリカ イタリア ドイツ 他 2 カ国	共通教育 (美術学部)	高橋周平	写真化・映像化された都市景観に対する考察
2003.07.22～ 2003.08.30	アメリカ	デザイン	猪股裕一	日本と米国デジタルデザイン教育の調査研究
2003.07.24～ 2003.10.03	イタリア ドイツ	工芸	池本一三	ガラス工芸におけるエナメル絵付け技法修得

海外研修派遣（表 -33）

5. 共同研究

① 目的

本学の教授、助教授、専任講師及び助手が共同で行う学術研究を助成することを目的とする。

毎年 11 月に募集し、選考により共同研究費を交付する。

研究者の構成は、学内外の研究者 4 人以上とし、多分野にまたがる専門領域とする。

② 採択基準、採択の手続き

共同研究費の予算額は、毎年度始めに理事会が定める。

共同研究費の交付の申請をしようとする者は、多摩美術大学共同研究費交付願により申請しなければならない。

共同研究費交付願に基づき申請のあった者のうちから、選考委員会により共同研究者と交付額を決定する。

共同研究費の採択にあたっては、各共同研究申請者の研究の趣旨、目的、研究計画を慎重に検討する。選考結果は、必ず年度当初の学科長会、教授会に照会することとする。

③ 研究成果の公表

研究課題名：調査・研究

A) 研究成果の報告について

イ. 報告時期：年月日

ロ. 報告先：教務部学務課、造形表現学部事務部

ハ. 報告様式：共同研究費研究成果報告の概要（保管部局、管理形態）

ニ. 報告をしていない場合は、その理由：

- ・研究成果物の作成の有無：有・無
- ・研究成果物の様式：報告書冊子
- ・研究成果物の保管・管理
- ・研究成果物を作成していない場合は、その理由：

B) 研究成果の公表について

イ. 公表の手段（例；学術誌名、学会名等）：

ロ. 公表時期：年月日

ハ. 公表していない場合は、その理由及び現在の状況：

ニ. ホームページの掲載状況についてみると、研究課題ごとに掲載内容にかなりの差があるのでホームページをもって公表とするのは無理な点がある。

ホ. 限定された部門、機関に配布される研究紀要集録は公表とはならない。

C) 研究成果の活用について（例えば、国会図書館への提供、特許申請、論文への引用、その他の活用があった場合は、その内容を具体的に記入すること。また、確認できる資料も添付することとする。）

イ. 研究者本人：

ロ. 他の研究者等：

活用については、共同研究の成果の具体的活用（教科書等）がなされているものについて記載すること。研究紀要集録は活用とはならない。

連名による論文の発表など、各研究者が共同で実施した内容を具体的に記入すること（確認できる資料も添付することとする）。

④ 課題

研究紀要の収録については、収録時期、紀要に代わる発表方法等に対する認識不足がある。ただし、美術大学という特性上、特に発表方法については、やむを得ないところもある。それらを補うため、成果報告をホームページで公開したり、成果報告が未収のものについては、一覧をホームページ上で公開し、問合せに応じられるような措置をとって来た。

成果報告の時期については、計画倒れになったものを除くと、紀要に代わるものに、発表等をすでに行っているものがある。共同研究の成果がより社会に還元され、納税者の理解が得られるような形で、取り組んでいきたい。

§ おわりに §

教育・研究グループが取り扱う事項は、各研究室 17 学科（専攻）、全学的教育方針の決定方法、入学試験（特別入試）の実施状況、国際交流、研究活動など、多岐に亘った。そのため網羅的にならざるを得なかった。

これら諸問題について、各セクションの垣根を越え議論を深め、問題解決をはかっていくことは、常に求められる課題である。今回の自己点検・評価活動においては、議論を深め問題解決を提示するまでに至らなかったが、その端緒となったという意味で有意義であったと言えるだろう。